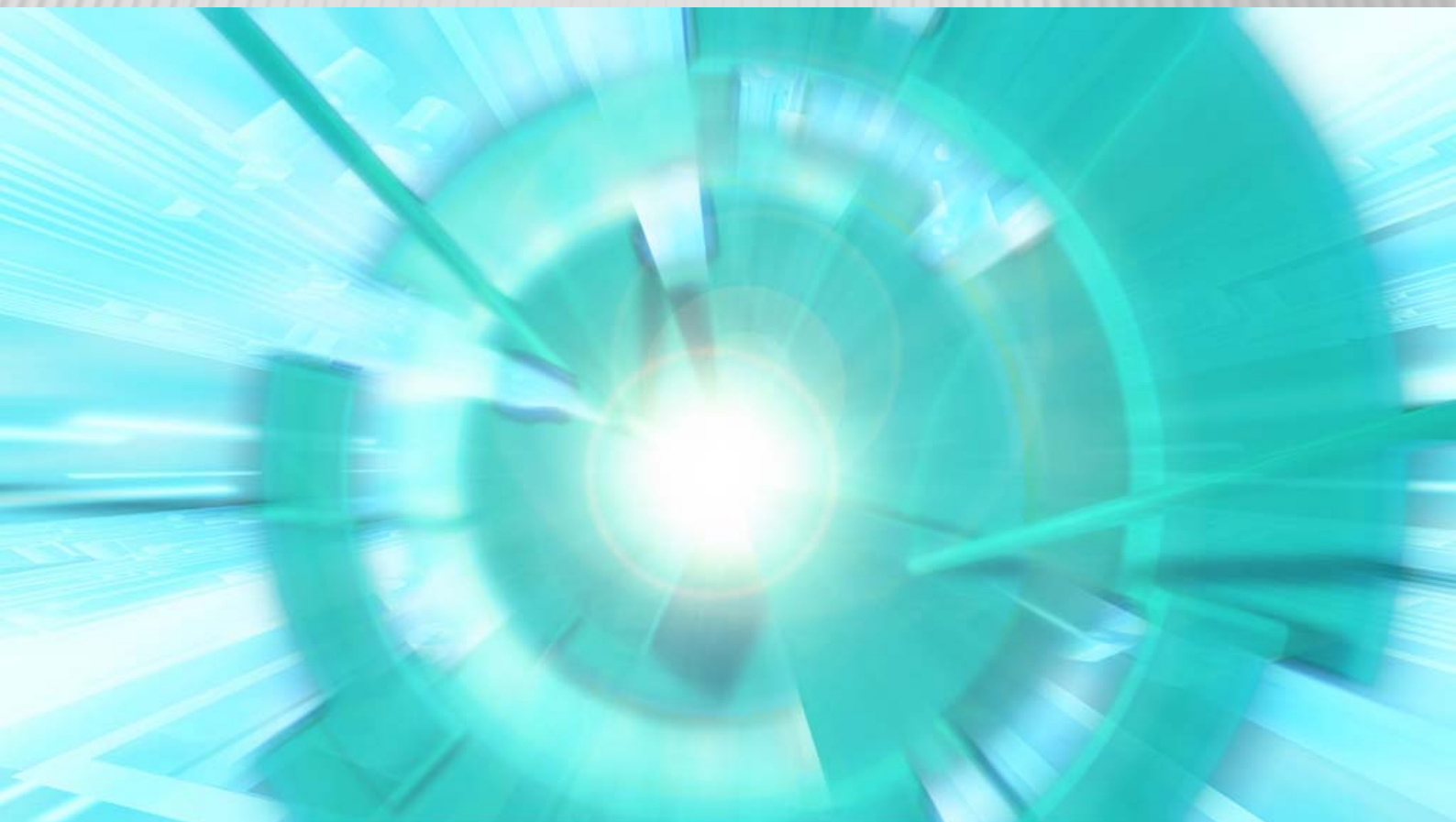


# 『留学交流』

2017年 9月号

特集

外国人留学生の宿舎支援と活用



JASSO

独立行政法人

日本学生支援機構

Japan Student Services Organization

特集 外国人留学生の宿舎支援と活用

- 【論考】** . . . . . 1
- 中国語圏における現代書院制教育  
-澳門大学の事例を中心に-  
Education of Modern Residential College in the Chinese-speaking World: A Case Study of the University of Macau  
帝京大学外国語学部准教授 山崎 直也  
YAMAZAKI Naoya  
(Faculty of Language Studies, Teikyo University)
- 【論考】** . . . . . 12
- 現代のホームステイのあり方に関する一考察  
-宿舎は留学生の学習・異文化理解を担えるか-  
A Study on Contemporary-Style Homestay: Do Accommodation Styles Determine Learning Outcomes and Inter-cultural Understandings of International Students?  
大阪大学 近藤 佐知彦  
KONDO Sachihiko  
(Osaka University)
- 【事例紹介】** . . . . . 33
- TUTグローバルハウスでの生活を通じた学びとつながり  
Learning and Building Relationships through a Life in TUT Global House  
豊橋技術科学大学グローバル工学教育推進機構 国際交流センター特任助教 蒲原 弘継  
KAMAHARA Hirotosugu  
(Center for International Relations, Institute for Global Network Innovation in Technology Education, Toyohashi University of Technology)
- 【事例紹介】** . . . . . 40
- 増え続ける外国人留学生の住環境問題、課題の解決  
-大学と提携することで、教職員の負担を軽減、留学生の生活環境を向上させる-  
Solving Problems and Issues of Living Environment: Improve the Living Environments of International Students ~Lighten the Burden of the Staff of a School by Cooperating with University~  
株式会社グローバルトラストネットワークス代表取締役 後藤 裕幸  
GOTO Hiroyuki  
(President & Chief Executive Officer, Global Trust Networks Co., Ltd.)
- 【海外の教育事情】** . . . . . 46
- アラブ諸国における高等教育国際化  
-UAE、カタール、エジプトを事例として-  
Internationalization of Higher Education in the Arab States: Case Studies of United Arab Emirates, Qatar and Egypt  
大阪大谷大学教育学部専任講師 中島 悠介  
NAKAJIMA Yusuke  
(Faculty of Education, Osaka Ohtani University)

# 『留学交流』

## 2017年 9月号 目次

### 【海外留学レポート】 ..... 52

第2の母国オーストラリアと出会う

-アデレードでの高校・大学留学生活から-

Meeting My Second Home Australia: Study in High School and University in Adelaide

南オーストラリア大学健康科学部（作業療法学科）卒 上 梓

KAMI Azusa

(Graduate, Bachelor of Health Science (Occupational Therapy), University of South Australia)

### 【インフォメーション】 ..... 58

海外留学支援制度（大学院学位取得型）の募集について

Application of JASSO Student Exchange Support Program (Graduate Scholarship for Degree Seeking Students)

日本学生支援機構留学生事業部海外留学支援課

Student Exchange Support Division, Student Exchange Department, JASSO

【論考】

# 中国語圏における現代書院制教育

マカオ  
-澳門大学の事例を中心に-

Education of Modern Residential College in the Chinese-speaking World:  
A Case Study of the University of Macau

帝京大学外国語学部准教授 山崎 直也

YAMAZAKI Naoya

(Faculty of Language Studies, Teikyo University)

キーワード：澳門大学、寄宿式書院制、外国人留学生宿舍

## はじめに

今年7月、4回目の海峡兩岸<sup>および</sup>暨港澳地区高校現代書院制教育論壇<sup>フォーラム</sup>が中国の西安交通大学で開催された。60を超える大学から450人余りの参加者が集い、「現代書院の内容と通識教育」を焦点として議論が交わされた（「通識教育」は英語の general education に相当する中国語）。最終的に、22大学39本の論文が採択されたが、27大学から108本の投稿論文が寄せられる盛況であったという<sup>1</sup>。

「海峡兩岸暨港澳地区」とは、中国・台湾・香港・マカオのことであり、中国語で「高校」とは、高等教育機関を意味する。説明を要するのは、「現代書院制」の部分であろう。一般に書院と言えば、中国を中心に日本、朝鮮、ベトナムに広がった前近代の私教育機関を意味する。中国では、唐代に始まり、宋代に大きく発展、主に民間における科挙対策の担い手として台湾を含む各地に開設されたが、清朝末期の科挙の廃止を受けて、中西兼学、即ち、中国の伝統的学問とともに西洋の先進的な知識を教える「学堂」に再編された<sup>2</sup>。科挙制度を導入しなかった日本では、教育機関として根づくことはなかったが、「書院造」という建築用語に往時の影響の名残りを留めている。しかし、「現代書院制」を

<sup>1</sup> 「第四届海峡兩岸暨港澳地区高校現代書院制教育論壇在西安交大開幕」『高校書院聯盟ウェブサイト』<http://sylvm.buaa.edu.cn/info/1055/1338.htm> (2017年8月25日閲覧)。

<sup>2</sup> 伝統的な書院の概念について詳しくは、吾妻重二(2008)「東アジアの書院について—研究の視角と展望—」『東アジアにおける書院研究』(『東アジア文化交渉研究』別冊2号)、3-20頁を参照。

掲げる同フォーラムは、儒教（朱子学）を基礎とする東アジアの伝統的教養教育の復権を提唱するものではない。近年、中国語圏の高等教育改革の中で、「書院」という言葉は、新たな意味を獲得しつつあり、「書院」の名の下で改革に取り組む大学間のプラットフォームとして、2014年に高校書院聯盟が成立、以来、会員校の持ち回りで毎年フォーラムが開催されている。「現代」と「制（度）」の二語に挟まれた今日の「書院」が伝統的な書院の概念と一線を画すことは明らかだが、中国語圏の各大学の「書院」と称する取り組みは、多様な形態を含み、明確な定義は難しい。

本稿では、近年、中国語圏の大学が導入を進める「書院」の概念を検討した上で、本年7月3日に筆者を研究代表者とする科研費「レジデンシャル・カレッジの導入と定着にみる中台港澳高等教育改革比較研究」（課題番号 16K04625）の企画として実施した葉銘泉澳門大学呂志和書院長の講演から、澳門大学の「住宿式書院制」の実態を紹介する。

日本ではまだ情報に乏しい中国語圏の高等教育改革の一面を扱う本稿は、「外国人留学生の宿舍支援と活用」という今号の特集との関連性が希薄に見えるかもしれない。しかし、筆者は、上述科研費の申請にあたり、本誌2015年9月号と2016年9月号の同趣旨の特集を参考にしており、本年2月には、2015年9月号の寄稿者である吉田千春氏と澳門大学呂志和書院を訪れている。また、2016年11月には、「書院」を研究する台湾の研究者を伴い、早稲田大学国際学生寮 WISH と京都産業大学の追分寮<sup>3</sup>を視察したが（WISH 視察は吉田氏も参加）、このことは、中国語圏の大学による「現代書院制」の展開と日本の大学による学生寮の教育寮化の動きが共通の問題意識に根差し、相互に学ぶべき部分を持つとの認識ゆえである。こうした経緯に鑑みて、アジア型レジデンシャル・カレッジの一事例と言うべき澳門大学の住宿式書院制は、日本の高等教育改革、就中今号の特集の関心層に訴求する部分があると確信している。

## 1. 「書院」とは何か？

英国の影響下で、早くも1950年代に「書院制度（カレッジ・システム）」を導入し、時代を超えてそのユニークな伝統を受け継いできた香港中文大学<sup>4</sup>を例外として、今日、中国・台湾・マカオの大学に広がる「書院」は、いずれも2000年代以降の新しい取り組みである。

「書院教育は、今世紀におけるグローバルな高等教育の新たな方向性であり、新たな趨勢である。書院は、学生の品格、集団生活、健康な心身などの育成を目的とする。中国古代の書院制度と英米のケンブリッジ大学、オックスフォード大学、イエール大学などのカレッジ・システムを受け入れて、

<sup>3</sup> 京都産業大学を視察先としたのは、同大学の学生寮が生活寮ではなく教育寮であることを明確に打ち出しているためである。同大学の学生寮の理念は、「学生寮とは」『京都産業大学ウェブサイト』[https://www.kyoto-su.ac.jp/facilities/sd/sd\\_about.html](https://www.kyoto-su.ac.jp/facilities/sd/sd_about.html)（2017年8月25日閲覧）を参照。

<sup>4</sup> 香港中文大学の書院制度の説明は、<http://www.cuhk.edu.hk/english/college/system.html>（2017年8月29日閲覧）を参照。

華人地域の各大学は、21世紀に至り雨後の筍のごとく書院を設立している<sup>5</sup>という一文は、2016年7月に澳門大学が3回目の現代書院制教育論壇を主催した際の澳門特別行政区政府のニュースリリースの説明であり、21世紀の中国語圏の各地域で同時並行的に進行する現象の全体イメージを端的に伝えるものだ。つまり、中国と西洋の教育の伝統を結合した「住学合一」（生活と学びの融合）に向けた動き、端的には、アジア版（あるいは華人版）レジデンシャル・カレッジの創設の動きに見えるが、中国語圏の大学の「書院」（北京大学元培学院のように「学院」と称する場合もある）と銘打つ取り組みをつぶさに見てみると<sup>6</sup>、かならずしも residential（居住型、中国語では「住宿式」と表現）とはかぎらず、正規カリキュラム外の教育プログラム（単位を取得できる場合とそうでない場合がある）や数日間の行事を「〇〇書院」と称する事例もある。いずれにせよ、今日の中国語圏の「書院」は、欧米のレジデンシャル・カレッジの同義語ではなく、より広い意味を含んでいる。

本稿では、中国語圏の各大学の「書院」を一つ一つ検討する紙幅はないが、全体の傾向を見ると、居住型か非居住型かという決定的な違いのほかに、自立性の有無（専従のスタッフを持ち、独自の決定を行うことができるか）、ある単位の下に位置づけられる場合、上は行政組織（例えば、学生課）か、教学組織（例えば、全学教育センター）か、規模は全学実施か、一部希望者のみが対象か、学生選抜の方式は無作為抽出（学部学科を超えた混住）か、学部学科ごとか、エリート主義を志向するか否か、留学生の有無、正規カリキュラムの枠内か枠外かといった点で、大学により相違が見られる。

しかし、実施形態の違いはあれ、今日の中国語圏の「書院教育」には、次のような共通の特徴が認められる。第一に、「書院」は、明示的であれ非明示的であれ、「博雅（リベラルアーツ）教育」を重視する。中国・中山大学の博雅学院、台湾・東海大学の博雅書院のように、「博雅」の二文字をそのまま名前に冠する事例もあるが、「専才」（1つの専門分野に精通した人材）ではなく「通才」（広範な分野に通じた人材）の育成が基本である。また、カリキュラム上の通識教育課程（全学教育課程）の一部をなす場合もあるが、学部学科の強固な縦割りと言語教育偏重に対するアンチテーゼが各大学の書院に通底する問題意識となっている。

第二の特徴は、全人教育の重視であり、これは知育一辺倒への反省に根差している。中国語圏には「五育」という考えがあり、道徳観・知識・体力・社会性・審美眼の均衡のとれた発達が教育の理想とされるが、厳しい受験競争の中で知育に偏重し、他の側面が軽視されているとの批判がある。

第三の特徴は、大学によって表現が異なるが、例えば「住学合一」、「学習無所不在（あらゆる場所

<sup>5</sup> 「兩岸高校現代書院教育論壇將於澳大舉行」『澳門特別行政政府新聞局ウェブサイト』、<http://www.gcs.gov.mo/showNews.php?DataUcn=102129>（2017年8月29日閲覧）。

<sup>6</sup> ここにおいて、中国語圏の大学で「書院」の一語が用いられるのは、伝統的な書院の持つ教養主義的イメージの取り込みという狙いのほかに、教学単位としての「学院」（英語の college/faculty、日本語の学部）に相当）との区別という実際的な理由があると考えられる。「学院」の一語を用いている北京大学では、「学系」（department＝学科）の上部の単位を「学院」ではなく、「学部」（英語では school）と称している。

に学びがある)」などの言葉で体现される考え方である。具体的には、授業外での学びの機会をいかに増やすかという課題への取り組みとして、問題解決学習や反転授業などと同列に位置づけられるが、教室での学びを「点」に終わらせず、「線」あるいは「面」として展開し、学習の生活化／生活の学習化を実現するための工夫という意味合いがある。このような関与は、行き過ぎれば管理主義という弊害を生むが、高等教育の大衆化という現実の中で、大学は面倒見の良さを求められている。

中国語圏における「書院教育」の広がりの中で注目を集めているのが、澳門大学が2014年のキャンパス移転を機に全面的に導入した寄宿式書院制である。その規模はアジア最大級を誇り、2016年に早くも現代書院制教育論壇をホストしていることから、大学の本気度が見て取れる。以下、第2節と第3節では、澳門大学の寄宿式書院制の全体像と具体的取り組みを論じてみたい<sup>7</sup>。

## 2. 澳門大学の寄宿式書院制 (Residential College System)

澳門特別行政区政府統計暨普查局<sup>センサス</sup>の『統計年鑑』によれば、2016年現在のマカオの面積は、30.5平方キロメートルでJR山手線内側(約63平方キロメートル)の半分ほどであり、人口は64万4,900人である<sup>8</sup>。高等教育機関は10校(公立4校、私立6校)、うち総合大学(university)が4校、単科大学に相当する学院(institute)が5校、ほかに警察大学校に相当する保安部隊高等学校がある<sup>9</sup>。1981年に東亜大学の名称で発足した澳門大学は、88年にマカオ政庁(99年にマカオ



写真 1 人工池が美しい澳門大学の新しいキャンパス (2016年2月29日、筆者撮影)

が中国政府に返還される以前のポルトガルの統治機構)によって公立化され、91年に現在の名称となった。当初は香港と同様、英国にならって学士課程を3年としていたが、1990年に4年制に再編した。現在、マカオで唯一の公立総合大学である澳門大学は、もともとタイパ島にあったが、2014年に川1本を隔てて西側にある中国広東省珠海市の横琴島にキャンパスを移した。物理的には横琴島の上にある約1平方キロメートルの土地は、上述した『統計年鑑』の総面積の計算から除外されているが、マ

<sup>7</sup> 澳門大学の寄宿式書院制のイメージを5分弱で端的に伝えるものとして、大学が英語・北京語・広東語の三言語で作成したPR動画があり、大学の公式YouTubeチャンネルで公開されている。[https://www.youtube.com/watch?v=\\_L4\\_iq0ifzU&t=20s](https://www.youtube.com/watch?v=_L4_iq0ifzU&t=20s) (2017年8月29日閲覧)を参照のこと。

<sup>8</sup> 澳門特別行政区政府統計暨普查局(2016)『統計年鑑2016』、29頁および45頁。なお、同年鑑は、統計暨普查局のウェブサイト(<http://www.dsec.gov.mo/>) (2017年8月25日閲覧)で入手が可能。

<sup>9</sup> 澳門特別行政区政府高等教育輔助辦公室 (<https://www.gaes.gov.mo/>)が毎年刊行する『高教統計數據彙編』では、公立の澳門大学、澳門理工学院、旅游学院、澳門保安部隊高等学校、私立の澳門城市大学、聖若瑟大学、澳門鏡湖護理学院、澳門科技大学、澳門管理学院、中西創新学院を大学に位置づけている。

カオ特別行政区の法律が適用される。インターネット利用環境もマカオと同様で、中国大陸では通常アクセスできないFacebook、TwitterといったSNSも使用できる。タイパ島の澳門大学旧キャンパス跡地は、旅游学院、澳門理工学院、澳門城市大学といった公私立大学のキャンパスとなっている。

2016年度版の『高教統計數據彙編』によれば、10大学の登録学生数は3万2,750人であり、98.37%に相当する3万2,215人が全日制に学んでいる。うち2万4,638人(75.23%)が学士課程に在籍している。本地生(マカオ出身者)に対する外地生(非マカオ出身者)の割合の高さがマカオの高等教育の特徴であり、外地生の総数は1万4,821人で45.25%を占める。その大半は中国出身者(1万3,949人)であり、香港出身者(344人)、台湾出身者(64人)と合わせると、その割合は96.87%に上る。澳門大学の学生数は1万29人で、大学院生が3,479人(サーティフィケート・プログラム在籍者120人を含む)、学部生が6,550人、うち3,692人(36.81%)が外地生である。唯一の公立総合大学である澳門大学では、全体傾向に比べて大学院生の割合が高く、外地生の割合が低い、外地生に占める中国・香港・台湾出身者の割合は95.10%で、全体傾向とほぼ同じである。ただし、澳門大学の3,692人の外地生は、いずれも学位取得を目的とする正規生の数であり、澳門大学註冊処の統計によれば<sup>10</sup>、27の国と地域の大学から派遣された136人が交換留学生として澳門大学で学んでいる(2016/17年度)。交換留学生でも、中国出身者の割合が最も高いが、60人と半数に満たない。第2位がポルトガル(16人)というのが澳門大学の特徴であり、日本が13人で第3位を占める。

移転によって約20倍の広さのキャンパスを得た澳門大学は、教育の内容と方法においても、新たな機軸を打ち出すことになる。「四位一体(four-in-one)」教育モデルの実践のため、約500人が入居できる寄宿式書院(residential college)を一度に8棟設置し、すべての新入生をそこに収容する態勢を整えた。キャンパス移転を機に、2010/11年度からパイロット・プログラムとして運営してきた寄宿式書院制を全学規模で展開することになったのである<sup>11</sup>。澳門大学が標榜する「四位一体」とは、専門教育、一般教育、研究インターンシップ教育、コミュニティ教育の四者の融合であり、深さと広さの双方を追求することを目的に、前二者は主に教室で、後二者は教室にとどまらず寄宿式書院や時にはキャンパスの外など、さまざまな場所で展開される。専門教育課程に対する一般教育課程は、2008年のカリキュラム改革で導入された。正規生に対する研究インターンシップ教育は、イノベーションと実践を強調し、科学研究に関する各種インターンシップの機会を大学が学生に提供する。その研究成果は、重要な学術会議や学術誌で発表され、国際的なコンテストで受賞する学生もあるという。キャンパス移転を機に寄宿式書院制が全学規模に拡大されたのは、コミュニティ教育の実践の場として、つ

<sup>10</sup> 澳門大学註冊処ウェブページ (<https://reg.umac.mo/>) (2017年8月27日閲覧)で歴年の統計資料の閲覧が可能。

<sup>11</sup> パイロット版の寄宿式書院制では、まず2つの書院が設置され、2013/14年度に3つの書院が増設された。キャンパス移転以前の取り組みについては、澳門大学ウェブサイトの当該ページ、[http://www.umac.mo/rc/pilot\\_rcp.html](http://www.umac.mo/rc/pilot_rcp.html) (2017年8月27日閲覧)を参照されたい。



まり、生活の場が即ち学びの場となることを意図したものだが、「四位一体」である以上、書院生活は当然のことながら他の三領域とも関連する。澳門大学の正規生は、単に所定の単位を取得するだけでなく、各領域で設定された卒業要件を満たすことを求められる。以下、2016/17年度版の住宿式書院制ブックレット<sup>12</sup>と葉銘泉呂志和書院長の講演を基に、澳門大学の住宿式書院制の全体像を素描する。

葉書院長によれば、澳門大学による住宿式書院制の全面的導入は、大衆化、資金源の多様化、アカウンタビリティを求める社会の声の高まり、国際競争、科学技術の応用、学習効果測定の重視など、高等教育の世界的な地殻変動に導かれたものであり、多様性と流動性を高めることを目的とする。今日の大学卒業生は、大学で1つの専門を修めて国内企業に就職、生涯を通じて1つの仕事を全うすることが難しくなっている。グローバルな知識基盤型社会を生き抜くためには、1つの学問領域に埋没せず複数の領域を横断して物事を考え、単に知識を求めるだけでなく、技能と豊かな感情を持たねばならない。個人として競争に打ち勝つことよりも、他者と協調してチームで物事を進められることが重要であり、効率性(efficiency)より有効性(effectiveness)が求められる。他者から設定される期待に応えるだけでは不十分で、専門性の発展に向けて自ら方向性を定めることができなければならない。複雑化する環境の中で、大学卒業生は、内心の望みと外界からの期待を結合し、自分が何をしたいのかとともに自分に何ができるのかをしっかりと認識する必要がある。

こうした変化に直面して、大学の人材育成は、教室という場所、講義という方法に固執することはもはや不可能であり、大学生活の全局面を通じて体験から多面的な学びを得る機会を学生に提供することが急務となっている。澳門大学の「四位一体」教育モデルは、専門的な学び(specialty learning)を通じてハードスキル(hard skills)を、教養的な学び(liberal arts learning)を通じてソフトスキル(soft skills)を身につけることを想定しているが、後者の主たる担い手となるのがキャンパス移転から2年で8棟から10棟に増えた住宿式書院である。

澳門大学の住宿式書院制は、学生の全人的成長を促すための方法として、英国のケンブリッジ大学とオックスフォード大学、米国のハーバード大学、イエール大学、プリンストン大学、またアジアにおける先駆である香港中文大学のレジデンシャル・カレッジ・システムを範として導入された。主にハードスキルの養成を担う7つの学院(faculty=学部)と相互補完性を発揮しながら、体験型の学びによってリーダーシップを備えた人



写真 2 呂志和書院のダイニングホール(2015年9月8日、筆者撮影)

<sup>12</sup> 澳門大学住宿式書院制のブックレットの最新版は、<https://rc.umac.mo/rc-system-booklet/> (2017年8月27日閲覧)で入手可能。

材を育成する。

約 500 人を収容する寄宿式書院は、上述のように 2016/17 年度に 8 棟から 10 棟に増えた。新入生は原則として全員入寮、学部 2-4 年の学生と大学院生も、少なからずそこで暮らしているが、学生の希望によらず大学が割り振りを決めるため、寄宿式書院には学部を異にする学生が集まる。また、海外大学からの交換留学生も、いずれかの寄宿式書院に入居するため、寄宿式書院は、自ずと異なる学問的・文化的背景を持つ者が共に学び、共に生活する空間となる。

一般の学生寮と寄宿式書院の大きな相違は、特定の専門領域（ディシプリン）によらない体験型の学びの機会を提供するために、専従の人員を持つか否かにある。澳門大学の寄宿式書院には、書院長 (College Master) を筆頭に、副書院長 (Associate Master)、レジデント・フェロー（以下 RF と略記）からなる専任のアカデミック・スタッフがいる。書院長と副書院長は各 1 人、RF は 2 人程度で、内外の大学で学長、副学長、学部長などの経歴を持つベテラン大学人が書院長、准教授レベルの中堅研究者が副書院長、ポスドクレベルの若手研究者が RF を務める。書院長、副書院長は、専門領域の授業を各学部で担当することもあるが、本務はあくまで寄宿式書院での学術指導であり、通いではなく住み込みで学生の指導に当たる (RF も同様)。アカデミック・スタッフとは別に、専従の事務職員が数名おり、さらには学部の教員も、非居住 (non-resident) フェローまたは協力者 (College Associate) として活動をサポートする。澳門大学の教員は、誰でも教育・研究のみならず、寄宿式書院でのコミュニティ教育に何らかの形で貢献することを義務づけられている (週 1 時間相当)。また、学生も重要な役割を担っており、一部大学院生がレジデント・チューター (RT)、学部生がレジデント・アシスタント (RA) として書院の運営をサポートするほか、芸術文化／学生・コミュニティサービス／スポーツと健康／広報／企画のワーキング・グループからなる House Association (学生委員会) がある。

寄宿式書院の具体的な教育活動には、(1) 単発のセミナー、ワークショップ、講演会、(2) 長期的・組織的な体験型教育プログラム、(3) House Association が組織する全書院生向け活動、(4) 各フロアの RT/RA が組織する活動、(5) 学生がグループで企画・実施する活動があり、アカデミック・スタッフ主導の活動と学生主導の活動の両方が含まれる。

学生の居室は 2 人 1 室で、2 部屋で 1 つのシャワールームを共用する。諸活動のための共有空間として、パントリー、ダイニングホール、多目的ルーム、ダンス練習室、音楽室、大小のセミナー室、フィットネスルーム、喫茶室などがある。こうした基本設備は、10 棟のそれぞれに設置されているが、そのほかに大学のグラウンド、体育館、プール、バスケットボール・コートなどを利

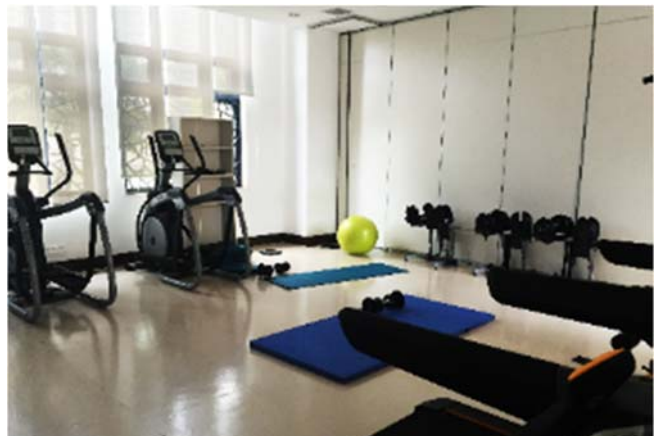


写真 3 呂志和書院のフィットネスルーム (2015 年 9 月 8 日、筆者撮影)

用できる。

豊富な人的資源と充実した設備に支えられた寄宿式書院制の使命は、学術的知識と相互補完関係をなすコミュニケーション力、幅広い関心、大学というコミュニティへの帰属感を備え、生涯を通じて学びうるオールラウンドな人材を育成することであり、知識・実践・態度の3つをモットーに掲げる。こうした使命とモットーの下で、5つのコンピテンシー（能力指標）を設定する。健康的な生活／人間関係とチームワーク／リーダーシップとサービス／文化活動への従事／グローバルな視野と市民性の5項目の能力指標は、寄宿式書院の諸活動と結びついている。例えば、学期に1回開かれるハイテーブルディナー（高卓晩会）は、年1回の参加が寄宿式書院の修了要件となる正式な活動で、数百人の書院生が正装に身を包み、外部から招かれた貴賓の講演を聴いたり、書院生自身が歌や楽器演奏を披露したりする中で、フォーマルな会食のマナーを身につけるイベントだが、この活動はもちろん、第2項の人間関係面での陶冶がその目的である。寄宿式書院の諸活動については、次節で呂志和書院の事例を具体的に紹介するが、総じてサービスラーニングを重視しているのは、能力指標の第4項との関連であり、それが時に国境を超えて行われるのは、第5項との関連である。

5つの項目での成長は、自己評価・ピア評価・教員評価の3つの方法で継続的に測られるが、いずれの項目においても、書院生活の経験を持つ学生が持たない学生を上回っていることが調査によって明らかになっている<sup>13</sup>。また、葉書院長の講演によれば、学業成績の面でも、書院生は非書院生より高いGPAの伸びを示しているという。書院生活のどのような要素がこの差を生んでいるのか、原因の解明が待たれるが、寄宿式書院制が学生に何らかのプラスの影響を与えていると考えられる。

キャンパス移転後の澳門大学の学生は、寄宿式書院の諸活動への参加が卒業要件となっている。2016/17年度版のブックレットによれば、学部1年から4年まで、学年ごとに要件が設定されている。

1年生が最も重く、上の学年に進むほど負担が軽くなる。例えば、1年生においては、ハイテーブルディナー：年1回参加、活動：学期に3回参加（うち2回は書院主催、あるいは書院のフロア、House Associationの主催によるものとする）、電子ポートフォリオ：毎年1月に自己評価を行い、5つの能力指標について新たに目標を設定、という要件が設定されている。要件を満たすことができなかった場合は、次学期または次年度に埋め合



写真 4 日本の食文化に関するフロア活動に参加（2016年2月29日、筆者撮影）

<sup>13</sup> この調査結果は、2016/17年度版の寄宿式書院生のブックレットで公表されているが、スポーツ（能力指標第1項に関係）、学生間の人間関係（第2項に関係）、リーダーシップ、コミュニティへの関心（いずれも第3項に関係）の各点で特に顕著な差が認められたという。

わせが可能であり、これによって卒業が認められないという事態に陥ることは少ないと考えられるが、寄宿式書院の活動への参加が入学から卒業に至るまで義務化されていることが寄宿式書院の正当性を高めている。

以上の理念と制度の下、澳門大学の寄宿式書院はいかなる活動を行っているのか、そのイメージをさらに明確なものとするため、10の寄宿式書院の1つである呂志和書院の活動を次節で紹介する。

### 3. 呂志和書院の諸活動—2016/17年度を例に—

マカオ出身の葉銘泉呂志和書院長は、高等教育を台湾で受け、工学者として台湾屈指の名門である国立清華大学で長年教育と研究に従事、学部長、副学長などの要職を歴任したあと、マカオに戻って呂志和書院の書院長となった。筆者と呂志和書院の縁は、2015年9月に調査研究のため同書院で聞き取り調査を行ったことに始まり、先方からの教育交流の申し出を受けて、2016年2-3月以来、呂志和書院と帝京大学の間で短期の学生の相互派遣が行われている。2017年7月までに、双方2回の派遣を実施しているが、4-6人の学生が1週間相手側を訪問、帝京大学の学生は、寄宿式書院の生活を体験する。本年7月3日の葉書院長の講演会は、2回目の呂志和書院生の日本訪問の間に行われたもので、筆者の科研費の分担者が勤務する目白大学を会場とした。

講演の中で葉書院長は、前節で述べた寄宿式書院制の理念と制度を説明した上で、呂志和書院の活動を豊富な写真とともに具体的に紹介したが、書院生活の様子がよくわかると参加者に好評であった。以下、その要点を紹介する。

4人のアカデミック・スタッフ（書院長、副書院長、RF）と4人の事務職員を専任として擁する呂志和書院は、現在488人の学生が生活し、その内訳は、1年生176人、2年生145人、3年生102人、4年生以上（院生を含む）65人である。設備は、前節の通り他の寄宿式書院と同じものだが、独自の施設として「心情茶室」と呼ばれる簡易カウンセリング室（相談室）を設けている。院生のRTが10人、学部生のRAが12人おり、RAはうち9人が2年生である。House Associationの3役（委員長、副委員長、書記）は、いずれも2年生で、5人のワーキング・グループ長も、2年生または3年生である。8人の専従教職員のほか、非居住フェローが10人、各学部の専任教員である協力者が34人いる。

寄宿式書院主催の活動には、(1)ハイテーブルディナー、(2)学者講座、(3)キャンパス活動、(4)海外交流、(5)サービスマーケティングがあり、このほかにHome Associationまたは各フロアのRT/RAなど、学生主体の活動がある。

英国のレジデンシャル・カレッジに由来するハイテーブルディナーは、学期に1回、ダイニングホールで行われる。筆者も、2016年2月に出席し、短いスピーチをしたが、このような貴賓による講演、学生による歌や楽器演奏などが行われる。学生にとっては、人間関係を深める機会であるとともに、社交性を高め、マナーを知ることでもある。

年数回行われる学者講座は、学内外の学者・専門家の講演会であり、2016/17年度には、心理学者の蔡宇哲教授（台湾・高雄医学大学）による「夢の殺人事件」と題する睡眠科学に関する講演（2017年8月17日）、物理学者の季向東教授（上海交通大学）による「宇宙の謎を解く中国の試み」と題する講演（同年8月27日）のほか、台湾出身のディズニーのアニメーターで『ライオンキング』などの作品を手がけた劉大偉氏による講演（同年9月7日）と創作ワークショップ（同年9月12-13日）、台湾出身で数々の流行楽曲を作詞した黄婷氏の講演（同年10月13日）、1998年から2002年まで国立清華大学の学長を務め、台湾で最も権威のある学術栄誉である中央研究院院士にも選ばれた情報科学者・劉炯朗氏（呂志和書院の Founding Master = 名誉書院長でもある）による講演「言語と文化のちがいについて」（2017年3月2日）が行われている。これらの講演は、いずれも各分野で豊富な経験と実績を持つ学者・専門家によるものだが、その内容は教養的な性質のものであり、高度な内容を平易な言葉でわかりやすく語るといったコンセプトに貫かれている。

キャンパス活動には、寄宿式書院を単位として参加する運動会が毎年の行事としてあり、昨年は、大学創立35周年の記念展にも展示を出している。また、期末試験の直前には、料理上手な葉書院長が自ら腕をふるい、書院生に湯圓（中国風の白玉しるこ）を振舞ったという。

呂志和書院でも、国際交流とサービスラーニングに力を入れているが、国際交流として、帝京大学との交流プログラムのほか、台湾の国立清華大学、高雄医学大学（いずれも書院教育を行っている）との間で双方向の交流が行われている。サービスラーニングは、マカオ、海外、遠隔の3つの類型を含み、マカオでは、低所得地域の子どもと老人に対する支援、海外では、ベトナム農村でのバイオトイレ建設や英語教育、タイ農村での橋梁の建設、中国福建省での土楼の修復、台湾での地域イベントなどに書院生が参加している。また、中国四川省の小学生160人に週1回オンラインで英語を教えるという活動も行われている。寄宿式書院は経費を補助するが、丸抱えというわけではなく、書院生自身がバザーや寄付を募るなどの方法で資金調達に動いているという。

以上のほかに、マカオへの理解を深め、帰属意識を高めるための活動として、「認識澳門（マカオを知る）」と題する企画があり、保安部隊高等学校訪問、民政総署（特別行政区の役所）主催の会議への参加、マカオの有名な中国書道家による教室、地元中等教育学校との連携などに学生が参加している。

学生主体の活動も数多くあり、ハロウ



写真 5 呂志和書院で行われた帝京大学訪問団との交流会（2017年2月21日、呂志和書院スタッフ撮影）

イン、中秋節といった季節のイベント、新入生歓迎活動、幹部学生（RA/RT）のトレーニング、バスケット、チアリーディングなどのクラブ、タレント・ショー（バンド演奏、ダンス、歌などを披露する一大イベント）などは、教職員ではなく学生が主体となる。

以上で述べたのは、ここ1年間の活動であり、学期中はほぼ毎週、大小の活動が行われ、学生は自らの関心に応じて、それに参加することができる。今年2月、帝京大学の学生4人が呂志和書院を訪れた際も、50人を超える書院生が学生のプレゼンを聴きに集まってくれた。

葉書院長は講演の最後に、住宿式書院と宿舍の相違を次のようにまとめた。書院は学びの場であり、宿舍は睡眠の場である。書院の人間関係は緊密だが、宿舍の人間関係は希薄だ。書院では各種の学習機会に関心を注ぐが、宿舍で関心を持つのはわが身のことだけである。書院を出て考えるのは人生の方向性だが、宿舍を出て考えるのはどうやって金をもうけるかに過ぎない。つまり、書院は大家族のようなものだが、宿舍はホテルのようなものだ。もちろん、澳門大学の10の住宿式書院は、それぞれ特色をもって運営されているが、そこが家族的な雰囲気を持つ学びの場であるという点は、すべての住宿式書院に共通する特徴と言えるだろう。

## おわりに

以上、本稿では、中国語圏の大学に広がる「書院」を澳門大学の事例を中心に紹介した。地域で唯一の公立大学に集中する豊富な資源に支えられ<sup>14</sup>、キャンパス移転というタイミングにも恵まれた澳門大学の住宿式書院制は、他の大学が容易に真似できるものではないだろうが、高等教育改革の壮大な実験の1つとして、その成否が貴重な示唆をもたらすと考えられる。また、日本の教育研究においてこれまで注目されることがほとんどなかったマカオに、こうした興味深い動きが現出していることを指摘したこと自体、一定の意義があると思う。

中国・台湾・香港・マカオの「書院教育」は、多くのものを共有し、相互に関係しあいながらも、それぞれの教育の歴史的文脈の中で、安易に一括できない独自性を持っている。筆者の科研費では、今後も中国語圏の「書院教育」の動きを追っていく。今年度内にも、台湾からゲストを招いて2回目の講演会を予定しているので、ぜひご注目いただきたい。また、多数の写真を含む葉書院長の講演資料をご所望の方は、筆者までメール(yama708@main.teikyo-u.ac.jp)でご連絡を賜りたい。

本研究は JSPS 科研費 16K04625 の助成を受けたものです。

<sup>14</sup> 政府から投入される公的資金に加えて、マカオ、香港では、民間からの寄付が高等教育の重要な財政的リソースとなっている。澳門大学の各書院の名称には、主たる寄付者の名前がクレジットされるが、呂志和書院の名称は、カジノとホテル経営でギャラクシー・エンターテインメント・グループの創業者で、アジア屈指の大富豪として知られる呂志和氏に由来する。

【論考】

## 現代のホームステイのあり方に関する一考察

### －宿舎は留学生の学習・異文化理解を担えるか－

A Study on Contemporary-Style Homestay: Do Accommodation Styles Determine Learning Outcomes and Inter-cultural Understandings of International Students?

大阪大学 近藤 佐知彦

KONDO Sachihiko

(Osaka University)

キーワード：留学交流、留学生教育、ホームステイ、外国人留学生宿舎

#### 1. はじめに（研究調査の背景と問題意識）

筆者の本務は短期留学生の受入である。

そして外国人学生の受入には魅力的な教育コンテンツと共に、適切な宿舎設備の提供が欠かせない。しかし、一般的な日本の大学にとって留学生宿舎は稀少資源である。

筆者勤務校では、通常の授業カレンダーに準拠しないサマープログラムを設計する際は、学外に宿舎を求めざるを得ない。空室率を下げる経営的観点から、私費や国費の学位取得の留学生もしくはセメスターに準拠した交換留学生などに学内宿舎が割り当てられてしまう。いきおいサマープログラム等では地域の宿舎を活用する必要があるが、インバウンド観光が活性化するに伴ってホテル稼働率も向上し、値段交渉にも一切応じてもらえない状況に陥ってきた。

そのような折に「自学のサマースクール参加学生にはホームステイが出来るよう手配して欲しい」という米国の協定校からの強い意向を受け、地域一般住宅に留学生を寄宿させるタイプの宿舎開拓に目が向いた。協定校では「Homestay Advantage」を期待しているという。彼らが想定するホームステイならではの利点とは、言語習得の加速や異文化理解の促進などではないか、と筆者にも漠然と想像は出来る。ただしそれを具体的に検証ができるものなのだろうか。

また訪日客の増加に伴って民泊が盛んになりつつある。そのなかの一類型として「ホームステイ型民泊」という宿泊カテゴリーも耳にするようになってきた。これも語感としては漠然と理解できるのだが、一般に我々がイメージする留学生のホームステイとはどのように相違するのか。米国協定校が

期待するホームステイと「家主在宅型民泊」「住宅宿泊事業」とを同じカテゴリーで括るのも乱暴だと思われる。ここで一旦原点に戻って「留学生ホームステイ」の概念を整理し、研究に向けての再定義を行い、その文脈でホームステイ研究の方向性を再考するのも無駄でない。そのためにまず先行研究を明らかにし、筆者らがこの夏全国の大学を対象に実施したアンケートの一部を紹介する。そして筆者がコーディネートするプログラムについて参加者を対象に行った予備調査についても報告する。

## 2. 先行研究概観

ホームステイについての研究調査は観光学に関連するものから (Bhuiyan, M. A. H. et al. 2012 など)、自治体が観光振興と地域の多文化受容を意図して調査を行った報告 (港区 2010 など) まで多様である。ただし、筆者自身にとっては「はじめに」で述べたようなホームステイ定義の混乱を整理する必要がある。そのため本稿はツーリズムなどの観点からの調査研究は一旦棚上げをし、またワーキングホリデーによるファームステイといった、なかば商品化された体験型教育旅行には立ち入らない。その一方で、旅行会社と大学との共同研究 (横田 2012) など手がかりとしながら、主として言語学習・異文化理解の観点から留学における「ホームステイの有り様・効用」について整理していく。

### 2.1. 留学生とホームステイの結びつき

数十年前の都会では一般の住宅に間借りをして「下宿」をする地方出身単身者が一般的だった。食事を提供しない間貸しと違って賄い付きもあり、宿舎としての基本的な有り様は現在のホームステイと共通点も多い。なかには勉強が捗るとか都会の言葉が身につく、といった評判の下宿もあったかもしれない。しかし教育関係者によって「Geshuku Advantage」などについて論じられた研究は、寡聞にして、筆者には見つけれなかった。では米国協定校の関係者にとっては当然視されているホームステイの利点とはどのような背景や歴史的経緯に由来するのだろうか。

山口 (2008) によれば「ホームステイ」という言葉が社会的に認知されたのは比較的近年のことである。最初に広辞苑に収録されたのが 1998 年の第五版で「留学生として訪れた学生が、一般家庭に寄留し、その国の習慣や言葉を学び、生活すること」だとされていた。ちなみに 2008 年の第六版では「留学生などが滞在地の家庭に寄宿し、家族の一員として生活すること」とされており、版が変わる 10 年間に「留学生限定」や「学び」の要素が若干薄くなり「家族の一員」がつけ加えられたことは注目したい。同じ広辞苑で「下宿」の項を調べると「やや長い期間を定めて他人の家に部屋住みすること。また、その家」となっており、下宿の定義から抜け落ちているのは「留学生」という宿舎利用主体の限定である。こうして「留学生」や「家族」がホームステイを構成する要素らしいことが伺える。ついでにいえば「ことばの発祥もと思われる欧米圏では、ようやく 2004 年 3 月に、homestay が The Oxford English Dictionary の新出の単語として採択されたばかり」 (山口 2008 p30) だという。

今日的な「ホームステイ」の起源は 1933 年とされる。米国人 Donald Watt が自国の十代の学生たち



を伴ってドイツとオーストリアに渡航し、現地家庭に一人ずつ学生を滞在させて、草の根の国際交流促進を図った教育旅行に起源を発する。WattによってEIL(The Experiment in International Living)と名付けられた企画は、そもそもは同年輩の学生が居る海外家庭を相互訪問して寝食を共にさせ、若者視点での家族ぐるみの国際交流を目的としていた(山口2008)。EILは1940年には日本にも米国人学生4人を派遣している。開戦前の緊張した日米関係にもかかわらず、当時の新聞紙上では「青畳と味噌汁で味わう“真の日本”。米国から交換息子とお嬢さん達」「碧眼交換娘と息子の見た日本。青畳上の四週間。離京前にさて得た結論は」などと好意的に紹介されている(山口2012)。このようにホームステイ(もしくはEIL)とは、金銭対価を主目的とする「下宿」や「家主在宅型民泊」などとは次元を異にする社会運動の側面が強い。筆者がビジネスの範疇(例えば民泊や下宿など)でホームステイを分類・議論することに若干の抵抗を感じていたのは、こういった社会運動的なルーツに端を発しているのかもしれない。また広辞苑の「下宿」の項で規定されている「やや長い期間の契約」を勘案すると、その関連概念としてのホームステイは比較的短期間の宿泊とするのが実態に叶っている。結果的に「ホームステイ」とは、金銭以外の対価や社会貢献を主目的としつつ、留学生等を家族として迎え、無償もしくは安価に比較的短期の宿舎を提供する、と仮定義しておく。従って「家主在宅型民泊」との相違点は、家族生活へのコミットメントや「金銭以外の対価」と「留学生等」におくのが妥当であろう。このあたりについては、後節で全国の大学関係者を対象におこなった調査とも関連する。また同アンケートにもその一端があらわれるが、食卓を共に囲む「家族として扱い」もホームステイの一般的なあり方である。ちなみに日本のEILは公益社団法人日本国際生活体験協会として現在も活動を続けている。

## 2.2. Homestay Advantage (言語習得)

さて、ホームステイならでの利点はどのように考えられてきたか。それについては、第二言語習得の文脈で論じた先行研究が目につく。教室外でも学習言語母語話者に接触する機会が多いホームステイ滞在者は、非母語話者などと共に暮らす留学生寮などに比べ、学習進捗度が高くて当然と考えられがちだからだ。本節では主として米国と日本での研究を参考にしたい。

まず米国人のロシア語学習者を対象とした研究である。Rivers(1998)は1976年から1994年までの約18年間に、米国からロシアに語学留学した2,529名の学生の成績をロシアでの宿舎環境と関連づけた。米国人学生のうち2,224人が寮に住み、305人がホームステイだった。そのサンプルに1994年から2年間について米国人学生285名のホームステイ学生のサンプルを加え、1976年から18年間の2,224人の寮宿泊者、590人のホームステイ参加者(ただし1976年から1996年までの20年間)の学習成績を比較している。Riversによればロシア語Speakingについて、ホームステイ学生は、学寮などの学生に比べて良い成績を残すことが出来ず、Listeningに関しても大きなアドバンテージが認

められなかった。その反面 Reading の成績に関してはホームステイ学生が他の宿舎に優越していた。

Rivers 研究は大量のデータを収集検討しており、統計研究として比較的信頼性が高いと考えられる反面、対象期間が 1976 年から 1994 年までの寮とホームステイ、1994 年から 1996 年までのホームステイの足かけ 20 年の長期にわたる。この間のロシアは社会主義ソビエト体制の崩壊といった社会変動を経験しており、調査対象初期と後期では留学制度までが一変している。ホームステイも形態が変遷し意味合いが変わっていたと考えられる。ただしそれらを考慮に入れたにしても、ホームステイ学生の Speaking や Listening の能力が伸び悩んでいたという結果は大方の予想を裏切ったものだった。この結果について Rivers 自身は、宿舎のタイプのみに限らず留学実施前の事前学習など留学を伴う言語習得に影響する重要な要素が他にもいくつもある、と論考している。

Rivers 研究は第二言語習得の枠組みの中で、一般に Homestay Advantage が期待される宿舎環境であったとしても、その成果は成績向上などで短絡的・量的に実証できるものではない、という複雑性を示した。Rivers に続く実証研究の中には、母語話者（ホストファミリー）と一緒に暮らしていたとしても、母語話者が実際の会話よりも「易しい話し方」をしがちであることから、ホームステイした学習者がオーラルコミュニケーションについて伸び悩む例なども報告されている (Iino 2006)。

その一方、外国人の日本語学習に関する報告にもいくつか注目すべきものがある。ホームステイをした学生は比較的学習進捗度が高い、という報告があるからだ。牧野 (1998) などその嚆矢とするが、なかでも興味深いのは鹿浦 (2007, 2008) による報告である。鹿浦は勤務校教務部の協力を得て、ホームステイ、セミナーハウス（寮）および学外のアパートに滞在した外国人交換留学生について、3年6学期間の日本語力の伸びを宿舎タイプとひも付けて比較した。6学期間では延べ 2,507 のサンプルとなり、データサイズから考えれば Rivers に匹敵する規模となっている。ただし鹿浦報告ではそのサンプル中で重複して計算されている学生の詳細が明らかにされていないなど、データ処理の細部に詰め甘さがあるようにも思われる。こうした気になる点は見受けられつつも、鹿浦 (2008) は「ホームステイをした留学生の成績は常に寮・アパートに住む留学生のそれよりいいと言える」(118) と断言している。鹿浦研究の強みは同一大学・同一プログラムに参加する外国人学生について、プログラム内容やホスト国の社会背景などに変化が少ない6学期間に限定して分析に取り組んでいるところにある。いわば短期決戦、学校・プログラム限定で Rivers に匹敵しうるようなサイズのデータを集め、またその範囲内で成績を比較している。複数学期と1学期在籍学生の混在などについては「割り引いて」考える必要があるかもしれないが、少なくとも鹿浦の勤務校においては日本語学習者に成績上の Homestay Advantage が示唆されたい、と結論しても良いだろう。

### 2.3. Homestay Advantage (学生満足度と互惠的交流)

ホームステイならではの利点は異文化交流・異文化理解の文脈で論じられることも多い。

米国からスペインや中国、ロシアに語学研修をおこなった学生を題材とした研究 (Di Silvio et al. 2014) では、オーラルスキルの向上とホームステイへの満足度やホストファミリーとの親密度とに関係があるとの報告がされており、チュニジアでのアラビア語学習に関する調査 (Shiri 2015) では、ホストマザーが15週のプログラム期間中に米国人留学生の異文化理解の深化に大きな役割を果たしていたこともレポートされている。

ひるがえって、学習者のアウトカムだけではなく、ホストファミリーの側がどのような期待を持って留学生を受け入れているのか、また現場でトラブルなどの解決にあたっているのか、といった研究が増えてきたのが近年の趨勢である。例えば Knight and Schmidt-Rinehart (2002) はメキシコおよびスペインで米国人学生を受け入れた家庭へのインタビューを通して、ホストファミリー自体が留学生への言語教育の大きな部分を担っているとの自覚を有している一方、学生達の生活態度や文化ギャップ、料理の好き嫌い、電話・部屋の清掃、学生によっては部屋に閉じ籠もってしまうなど、いくつかのパターン化されたストレスを抱えていることを報告している。そういったホストファミリーのストレスを軽減する対策が Homestay Advantage を最大化する方策であると提言されている。良い学習成果を得るためには学生自身と共に、受け入れ家庭の環境などへの調査研究、そして適切なオリエンテーションが必要である、という議論には十分に説得力がある。Schmidt-Rinehart and Knight (2004) においても、関係者のインタビューの結果、学生、ホストファミリーそしてホームステイエージェントのいずれもがホームステイならではの利点を肯定していると結論づけており、ホームステイによって学習者の留学満足度が上がるとされた。

Cook (2006) は食卓での学習者とホストファミリーの会話の分析を通して、ホスト国で共有されている常識やステレオタイプなど、ごく身近で文化的なトピックについて、日常的な言語交流を通して学習者がホスト文化の機微を学んでいくプロセスを明らかにした。こういった過程を通じ、ホストファミリーにとっても自文化への理解が深まると共に、受け入れた学生の文化についての理解も深まる。そして Iino (2006) が日本語学習者のホームステイ環境での家族と学生の会話などのエスノグラフィーを分析しつつ強調したのは、ホームステイにおいては、異文化理解や自国文化の理解そして外国語学習などについて、学生だけでなくホストファミリーも利益を受けるという「一挙両得性 two-way enrichment」であり、Homestay Advantage は独り学習者だけにもたらされるものではなく、受け入れた家庭からもそれが期待されている、というポイントだった。

以上のようにホームステイ研究の趨勢は、EIL 以来のファミリーや地域社会などにも外国人留学生を受け入れて様々なメリットが得られる、とそれらを確認する方向に向かっており、例えば、ファミリーの満足度達成感と学生の留学満足度の相関などが検討される方向性が強くなっている。このあたりは社会運動的な EIL に起源を発するホームステイのあり方が大きく影響しているのだろう。

ただしここまでレビューしてきて気になるのは、一連の研究に「ホームステイは良い」との前提あ

りきの議論が多いように思えるところである。Homestay Advantage に対しても、様々な条件を勘案しながらの是々非々の客観的な検討が顧みられない傾向がある。今後は批判的かつ実証的なアプローチからホームステイ効果の検証を行う必要性があると考えられる（山口 2012）。

### 3. 大学アンケート

筆者および研究グループでは、2017年5月から7月にかけて、全国で留学生の受入をおこなっている機関を対象として調査協力を依頼した。全国でのホームステイ状況を知る目的としては十分にはほど遠いサイズのサンプル数であるものの、それでも国公私立大学等63校からの返答を頂いており、その結果について中間報告として一部紹介したい。

本調査は旧メディア教育開発センターが開発したREAS(リアルタイム評価支援システム)を用いて筆者自身がアンケートを制作し、ネット上でデータを収集した。項目総数73。回答はホームステイを「実施している」「まだ実施していないが検討中」「かつては実施していたが中止した」「方針としてやらない」という4つのグループに分けて分岐していく形をとっており、記名での回答を促している<sup>1</sup>。すべてについて詳述する紙幅はないが、本報告ではまずホームステイとは何か、という定義部分について、回答者の宿舎への取り組みの違いにみられる差異を概括していきたい。

#### 3.1. ホームステイの定義と意義

民泊？	まったく思わない	そうは思わない	そう思う	強くそう思う
HS 実施	5	6	2	
HS 検討		1		
HS 中止	2		1	
HS やらない	4	16	7	

(食事付) 下宿？	まったく思わない	そうは思わない	そう思う	強くそう思う
HS 実施	4	8	1	
HS 検討		1		
HS 中止	1		2	
HS やらない	3	10	13	1

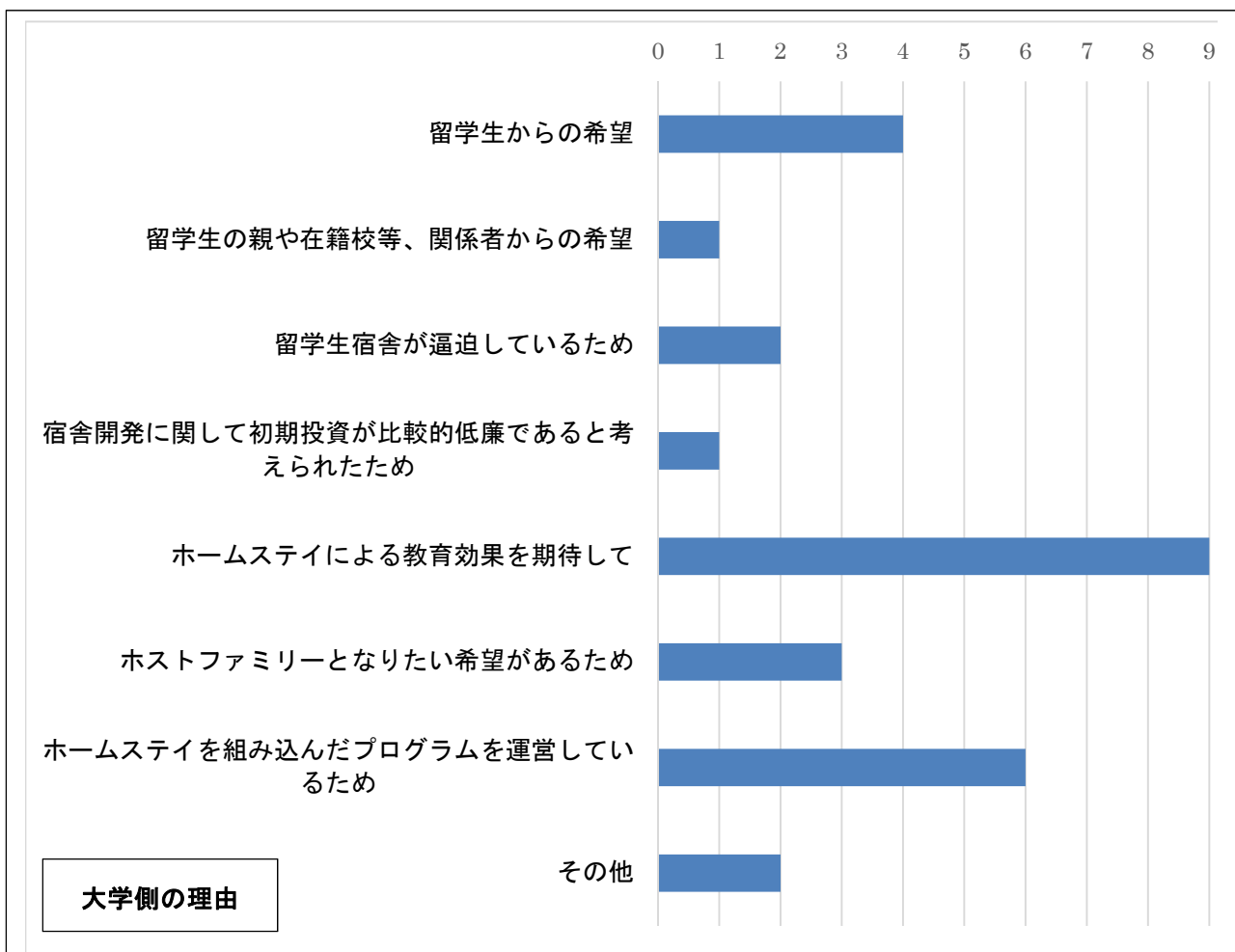
草の根交流？	まったく思わない	そうは思わない	そう思う	強くそう思う
HS 実施			6	7
HS 検討			1	
HS 中止		1	1	1
HS やらない			16	11

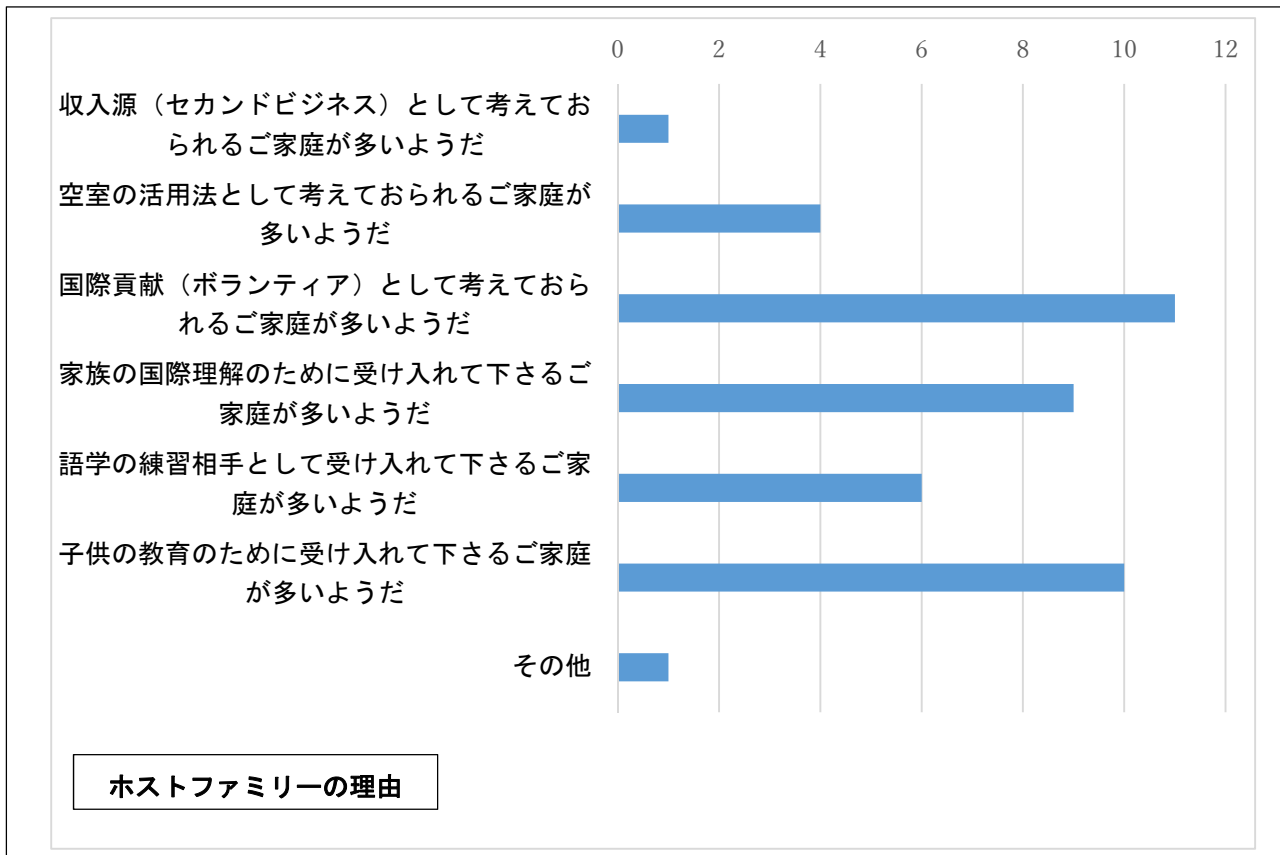
<sup>1</sup> 巻末に質問項目・分岐を収録している。添付資料1

アンケート回答者全員に対して「留学生のホームステイと、ネット等による『民泊』による外国人受入とは、宿舎の形態として相違しているとお考えでしょうか」との質問を設けているが、サブ項目として「留学生ホームステイは（広い意味では）民泊の一部である」「留学生ホームステイは本質的には（食事付き）下宿である」「留学生ホームステイは草の根の国際交流として有効である」という三つの間に対して「強くそう思う」から「まったくそうは思わない」までの4段階で回答を求め、回答を整理したのが前頁の表である。相当数の学校がホームステイと民泊とは同種の宿舎である、という認識を持っていることが伺える。同様にホームステイを中止したり、取り組むつもりのない学校が「ホームステイは賄い付き下宿」という認識であることも留意したい。そしてホームステイに実際に取り組んでいる学校においてもその認識に幅がある。正面切って「ホームステイとは何か」について問われたときに、そのあり様については、教育関係者の間でも共通認識として定着はしていない。逆に「草の根交流か」については一機関を除いて意見が概ね一致していた。ある学校が例外的な認識を示した事情については次節で少し紹介する。

### 3.2. Homestay Advantage への期待と課題

また次に示すのは、ホームステイ受入を実施している大学側が「ホストファミリーをはじめた大学側の事情」そして「学生を受け入れてくれるファミリーの事情」についての質問である（複数回答可）。





大学側は「ホームステイによる教育効果を期待して」「ホームステイを組み込んだ教育プログラムがあるから」という理由が「留学生宿舎が逼迫している」というような理由づけを圧している。また受け入れ家庭の動機としては「国際貢献」「家族の国際理解」「語学の相手」「子供の教育のため」が「収入源（セカンドビジネス）として」より強い、と大学は理解している。

そして調査協力校でのホームステイは、一校を除いて食事付きで（その一校は「受け入れ家庭にお任せ」と回答）、一泊あたり各家庭には高いところで3,000円程度が支払われている模様だった。また一部には無償での受入（全くのボランティア）もあるらしい。金銭対価ではなく、各受け入れ家庭ではIino（2006）が強調したような、学生とホストファミリー双方に利益がある「一挙両得性 two-way enrichment」に期待をしつつ、食卓を囲んで学生の受け入れを促している模様である。一方その期待が「すれ違った」とときには深刻な事態も起こりうる。ここでは3.1.で「ホームステイは草の根の国際交流とは思わない」と回答したホームステイ中止校が記入した個別コメントを引用する。

留学生、ホストファミリー双方から苦情が出てその都度教職員で対応。留学生からは子どもがうるさく眠れない、ホストファミリーからは家賃の滞納、ルールを守らない、生活態度がなっていない、無断外泊、たばこを吸いすぎなど。特に、ホストファミリー側は、受入れ期間終了後に不満を爆発させることもあり、教職員で菓子折りを持ってお詫びにいったこともある

教職員が直面するトラブルのみならず、そのトラブルが大学と地域との関係性をこじらせてしまいかねない深刻なものになる可能性すらあることが判る。

#### 4. 夏期プログラム

冒頭で述べたとおり、筆者は勤務校において短期留学の受入を行っている。一年から三週間まで複数のプログラムを運営しているが、その一つに日本語集中プログラム J-ShIP (Japanese Short-term In-session Program) がある。夏と冬の二つの受入パターンがあるが、夏プログラムは米国の夏休み期間中(6月下旬から8月上旬まで)にあわせて開催される。夏のプログラムでは日本語学習歴ゼロ、もしくはきわめて短い参加者を対象として、8週間の間に90コマのカリキュラムを提供、50-60人を主として米国の協定校から受け入れている。その宿舎はキャンパス近辺の民間学生アパート(単身室)の借り上げによってまかなってきた(近藤 2012)。ところが3年ほど前には米国協定校からホームステイ宿舎をオプションに加えて欲しい、という強い要望があり、ここ数年はホームステイが20人、アパート宿泊が30人程度になっている。アパートはキャンパスから徒歩圏内で自炊、ホームステイは公共交通機関利用で1時間以内の立地となる。ホームステイなら一日二食付きで、食事の心配をしなくて良い代わり、4万円ほどの追加料金と学校までの交通費が余分にかかる計算となる。2017年6月から8月にかけてのプログラムでは参加者49名(フランスからの1名を除き米国の大学から)のうち、アパートを選択した者30名(うち男10、女20)に対し、ホームステイを選んだ者が19名(うち男10、女9)となっている。学生の国籍はフランス1、中華人民共和国10、残りが米国となっていた。

これらの学生を対象にまずプログラム開始時にプログラムおよび宿舎への期待度についての事前アンケートを収集、プログラム終期には宿舎とプログラム満足度についてのアンケートを実施し、また彼らの成績を検分して有意な差が出るかどうかを調べた。なおデータ収集の関係から事前アンケートについては27名分の他のサマープログラム参加者についてもあわせて分析をおこなっている。これは理工系の学生が8週間の間大学研究室で研究インターンとして活動するプログラムで、全員が米国から参加し、うち7名がホームステイ、8名がアパート、12名が大学寮を選択していた。

こうして宿舎入居前のプログラムオリエンテーション時の「事前アンケート」<sup>2</sup>、またプログラム最終週の帰国オリエンテーション時でJ-ShIP参加学生49人を対象とした「事後アンケート」<sup>3</sup>を分析した。アンケート収集に際して、研究に使う可能性も含め、対象者には調査趣旨を口頭で説明して記名で回答を求めた。回収率は100%となっているが一部に欠損のあるデータも見られた。

<sup>2</sup> 質問紙を添付資料2として添付

<sup>3</sup> 質問紙を添付資料3として添付

## 5. アンケート項目と成績の相関

今回の事前アンケートでは「宿舎を選ぶ際に重視したこと」「プログラム終了後の目標」を尋ねている。事後アンケートでは、「宿舎での生活の満足度」「異文化理解度」、ホームステイ学生に限り「ホームステイ満足度」を尋ねた。以下では、これらのデータを元として、ホームステイを選択した学生とそうでない学生はそれぞれ宿舎を選ぶ際、何を重視していたのか（宿舎やプログラム内容について）、ホームステイを選択した学生とそうでない学生の成績には差がでたのか（もしくは、でなかったのか）、ということを検討したい。

分析にあたりデータの処理について述べる。

事前アンケートでは、「宿舎を選ぶ際に重視したこと」「プログラム終了後の目標」二つの設問について複数の選択肢から、5つ選択させ、その上で優先順位を答えてもらっている。解答の最小値は0であり、最大値は5である。当然のことながら、1番重視している項目については5ポイント、5番目に重視している項目については1ポイントをあてた。その上で、ホームステイを選択した人とそうでない人（以下、住居選択変数）を独立変数とし、それぞれの項目について「平均の差」を見ていく。事後アンケートについては、「生活満足度」「異文化理解度」について、5段階で満足度を尋ねている（最小値1、最大値5）。これらの項目についても住居選択変数を独立変数とし、それぞれの「平均の差」を分析した。また成績<sup>4</sup>についても同様に住居選択変数を独立変数とし、「平均の差」を分析した。分析にはSPSSを用いている（記述統計量は脚注参照）。

### 5.1. 事前アンケートの分析

住居選択変数を独立変数とし、「宿舎を選ぶ際に重視したこと」<sup>5</sup>「プログラム終了後の目標」<sup>6</sup>について平均の差を分析した。その結果は次表の通りである。まず、宿舎を選ぶ際に重視したことについて、ホームステイ選択者が重視した項目でかつ0.1%水準で有意であったものは「食事」「地域住民との交流」「家族的な雰囲気」「言語学習」（イータの値はそれぞれ、0.383, 0.772, 0.506, 0.379）である。逆に、ホームステイ以外を選択した学生が重視したことのうち、0.1%水準で有意であったものは「費用」「広さ・間取り」「プライバシー」「立地・通学距離」（イータの値はそれぞれ、0.322, 0.335, 0.358, 0.335）である。また1パーセント水準で有意であったものは、「個人専用水回り設備の必要」「ネット環境」「プログラム参加学生同士の交流」（イータの値はそれぞれ、0.239, 0.25, 0.279）である。

これらの結果から、ホームステイを選択した学生は、宿舎選択にあたり「食事」「地域住民との交流」「家族的な雰囲気」「言語学習」を重視しており、ホームステイを選択しなかった学生は「費用」「広

<sup>4</sup> 成績に関する記述統計量は本稿末の表Ⅰの通りである。

<sup>5</sup> 「宿舎を選ぶ際に重視したこと」に関する記述統計量は、本稿末の表Ⅱの通りである。

<sup>6</sup> 「プログラム終了後の目標」に関する記述統計量は、本稿末の表Ⅲの通りである。



さ・間取り」「プライバシー」「立地・通学距離」「個人専用水回り設備の必要」「ネット環境」「プログラム参加学生同士の交流」を重視していた。換言すれば、今後サマープログラムでホームステイを推奨するのであれば、ホームステイ以外を選択した学生が重視していた項目について改善していくことが必要だと言えるかも知れない。たとえば筆者が対象とした J-ShIP については、ホームステイ選択者の方が4万円ほど費用は高く、立地条件（通学時間・通学交通費）に関してもやや出費がかさむ。今回の結果から宿舎選択決定要因の多様さが示唆されている。

	ホームステイ選択者			その他			分散分析表（抜粋）		
	平均値	度数	標準偏差	平均値	度数	標準偏差	自由度	F値	有意性
費用	0.231	26	0.7104	1.367	49	1.9224	1	8.431	***
広さ・間取り	0.269	26	0.9616	1.429	49	1.8143	1	9.202	***
プライバシー	0.423	26	1.1375	1.898	49	2.1335	1	10.75	***
個人専用水回り設備の必要	0.154	26	0.7845	0.816	49	1.4955	1	4.434	**
ネット環境	0.539	26	1.2404	1.408	49	1.7902	1	4.877	**
食事	1.577	26	1.5537	0.51	49	1.0433	1	12.53	***
大家との交流	0.269	26	0.9616	0.122	49	0.5997	1	0.662	
地域住民との交流	3.731	26	1.8013	0.408	49	0.9772	1	107.8	***
地元学生との交流	1.115	26	1.5831	0.959	49	1.3838	1	0.196	
プログラム参加学生同士の交流	0.154	26	0.5435	0.837	49	1.3439	1	6.147	**
立地・通学距離	0.885	26	1.5576	2.163	49	1.8183	1	9.243	***
立地・キャンパス以外との距離	0.615	26	1.0983	0.612	49	1.2044	1	0	
安全	0.231	26	0.6516	0.388	49	0.975	1	0.543	
家族的な雰囲気	1.692	26	1.7151	0.204	49	0.8655	1	25.08	***
言語学習	2.308	26	1.4905	0.939	49	1.6759	1	12.21	***
学修に集中できる環境	0.192	26	0.801	0.612	49	1.32	1	2.194	

\*:p<0.05, \*\*:p<0.01, \*\*\*:p<0.001

続いて、プログラム期間中に「どのような学びや経験を得たい」と考えているかの期待について事前アンケートへの記入を点検する。

次頁の表ではホームステイ選択者とそれ以外の選択者の差を検討している。既に検討した宿舎選択の理由付けとは異なって、プログラム参加への期待については、ホームステイ選択者とそれ以外の選択者の間で有意な差のある項目は「日本人の生活を知る」を除いては析出されなかった。

外国人学生にとって、日本で何を身につけたいか、知識を増やしたいか、ネットワークを広げたいか、経験をしたいか、といった期待は宿舎選択には無関係で、わずかに「日本人の生活を知りたい」という目的意識がホームステイを選ぶ理由となっている（イータ値は0.343）。前問で明らかになった

ホームステイ選択者が重視する「食事」「地域住民との交流」「家族的な雰囲気」「言語学習」といった項目も日本で期待されるアウトカムとしては「日本人の生活」に収斂しているようだ。学生にとって「日本語の集中講義で良い成績をとりたいのだったら日本でのホームステイをしなきゃ」というようなアカデミックな意味で Homestay Advantage が期待されているというわけではない。

	ホームステイ選択者			その他			分散分析表（抜粋）		
	平均値	度数	標準偏差	平均値	度数	標準偏差	自由度	F値	有意性
日本語習得	2.54	26	1.923	2.7	49	1.89	1	0.117	
日本の大学・研究を知る	1.15	26	1.87	1.4	49	1.758	1	0.32	
単位を在籍校で互換する	0.54	26	1.363	0.87	49	1.642	1	0.763	
日本・大阪の文化を体験する	2.69	26	2.055	2.95	49	1.634	1	0.35	
日本人の生活を知る	2.35	26	1.875	1.13	49	1.462	1	9.706	***
同年代の日本人と知り合う	0.96	26	1.483	0.98	49	1.57	1	0.003	
様々な年代の日本人と知り合う	1	26	1.327	0.59	49	1.13	1	1.937	
プログラム参加者同士で交流する	0.27	26	0.667	0.64	49	1.283	1	1.921	
日本で新たな可能性を探る	0.62	26	1.235	0.78	49	1.399	1	0.248	
関西・大阪を旅行する	0.92	26	1.383	0.64	49	1.282	1	0.811	
日本を旅行する	2	26	1.497	1.8	49	1.316	1	0.362	

\*:p<0.05, \*\*:p<0.01, \*\*\*:p<0.001

## 5.2. 事後アンケートの分析

その後約2ヶ月を経てプログラム終期にとった事後アンケートを分析した結果、「生活満足度」「異文化理解度」など<sup>7)</sup>について、ホームステイとアパート等では「様々な年代の日本人と知り合えた」（イータの値は0.317）という項目を除き、有意な差は認められなかった（下表）。

	ホームステイ選択者			その他			分散分析表（抜粋）		
	平均値	度数	標準偏差	平均値	度数	標準偏差	自由度	F値	有意性
大学の講義以外の学習	4.42	19	0.692	4.18	28	1.02	1	0.815	
日本の活字を読む	3	19	1.054	2.5	28	1.202	1	2.158	
日本のテレビ番組鑑賞	3.63	19	1.257	3.04	28	1.453	1	2.118	
日本人の電話会話やネット連絡	2.89	19	1.487	2.64	28	1.339	1	0.366	
関西・大阪の旅行	4.58	19	0.607	4.64	28	0.731	1	0.099	
日本の旅行	4.32	19	0.885	4.14	28	1.38	1	0.232	
日本語で会話する機会があった	4.11	19	0.937	4.15	26	0.967	1	0.028	
日本人の生活を知ることができた	4.21	19	0.918	4.04	26	0.871	1	0.41	
日本・大阪の文化を体験できた	4.53	19	0.612	4.38	26	0.697	1	0.502	
日本の大学やその研究を知ることができた	3.56	18	0.856	3.42	26	1.206	1	0.161	
実践的日本語が身についた	3.72	18	0.958	3.85	26	1.008	1	0.167	
日本語学習に成果があった	4	19	0.882	3.88	26	0.993	1	0.163	
生活の悩みについて相談できる相手がいいた	4.21	19	1.134	4.23	26	0.951	1	0.004	
学習に関して悩みについて相談できる相手がいいた	4.11	19	1.049	4.15	26	1.008	1	0.025	
同年代の日本人と知り合えた	4.21	19	0.918	4.08	26	0.935	1	0.028	
さまざまな年代の日本人と知り合えた	4.16	19	0.958	3.38	26	1.299	1	4.81	*
プログラム参加者同士で交流した	4.58	19	0.692	4.38	26	0.941	1	0.579	

\*:p<0.05, \*\*:p<0.01, \*\*\*:p<0.001

<sup>7)</sup> 「生活満足度」及び「異文化理解度」の記述統計量は本稿末の表IVの通りである。

ただしこの表からも明らかな通り、事後アンケートにおいては宿舎に焦点を絞った項目は設けておらず、その結果、住居形態による差が見られなかったことも考えられる。

そもそも質問票の設計時点では、帰宅してからの日本語学習・実践やホストファミリーとのテレビ鑑賞、近郊への家族旅行・レクリエーションなど、ホームステイとアパートとの間で生活パターンに差が出ることも想定・期待されていた。実際の学生生活は筆者の想定と異なっていたようだ。結果として質問紙設計が不十分であったところではあるが、次回以降は項目を再点検し、Homestay Advantageがあるとすれば、その発見と検討とが可能なデザインとしたい。

なおこの夏の日本語サマースクール J-ShIP の成績については、全体平均としては 100 点満点では 87.6 点。そのうちホームステイ学生 19 名の平均点が 89.9 点に対し、アパートの学生 30 名が 86.1 点となった。多少の差異が認められるものの、統計上有意な差とまでは言えない状況に止まっている。今後もデータ集積をすすめ、引き続いての分析・検討を必要としている。

## 6. まとめ（現代の Homestay Advantage とはなにか）

本稿ではその定義と絡めて「ホームステイと民泊・下宿との違い」そして「ホームステイならではの利点」について様々な角度から検討してきた。

教育機関等を対象としたアンケートにおいては学生に対する「教育効果」への強い期待や、プログラムと関連付けられていることも明らかになった。同時にホームステイ運営自体が大学教職員の重荷になっており「もうこりごり」という様な経験をした関係者がいたことを紹介した。このようなトラブルを軽減するのは当然として、Homestay Advantage とは学習者のみにあるのではなく、大学や受け入れ家庭が享受する裨益を最大化するようなデザインや運用を考える必要があるのではないかと思われる。

一方夏期 J-ShIP の参加者からの意見をとりまとめると、ホームステイを選ぶ学生には Homestay Advantage に向けて強い期待があるが、それは勉強を進めたいというよりも、日本人の生活実態を知りたい、という望みである。実際にも 8 週間のプログラムにおいて言語習得上の Homestay Advantage は、少なくとも成績などで客観的に認められるほどには差がついてはいなかった。Rivers (1998) の例を引くまでもなく、ホームステイの教育効果については成績比較に基づく検証が十分に出来ているとは言いがたい。成績の良否には当然ながら様々なファクターが絡む。また仮に「家族の一員」として家庭に受け入れられたからといって、その家族のあり方も一様ではない。宿舎の違いというのは、学習時間、適性、教員習熟度、関連知識、基礎学力、文化資産、学習方法、教材、教室外学習時間など、成績に効果を及ぼす数多いファクターのひとつにすぎない。宿舎タイプによって成績に差が出るのか、といった設問にはさらに多面的なデータを集めての研究が必要となる。同一プログラム（たとえば J-ShIP）内で比較検証をするにしても、「ホームステ

イ先でどのような教室外学習をしているか」「アパートでどのような教室外学習をしているか」という調査・検討を抜きにして、成績の差異を宿舍のタイプだけに還元する議論自体が非現実的だとも思われる。先行研究などを参照した限りでは、ホームステイ学生の留学満足度が高め、といった傾向は伺える。留学満足度を Advantage と考え、「どのようなホームステイが Homestay Advantage（留学満足度）を最大化するか」といった議論へと研究トピックの若干のシフトを図るのも一案であると思われる。

また、受け入れ家庭が外国人留学生受け入れに対して抱く期待を考えれば、もう少しドラスティックな研究や運営のパラダイム転換を模索しても良いかもしれない。受け入れ家庭の家族や子弟のチューターやメンターとして留学生に若干のトレーニングを施し、受け入れ先での留学生の貢献をコストに反映させた受け入れシステムを設計することも出来るだろう。留学生にとっては比較的安価で、受け入れ家庭にとっては交流がプログラム化されたホームステイを提供することで、留学生・ファミリー双方に対する Homestay Advantage を具現化・最大化するといった「一挙両得 two-way enrichment」(Iino 2006) のアプローチも考えられるかもしれない。

筆者らは引き続いてホームステイ学生とアパート学生の成績比較などのデータ集積を行っていくつもりだが、この報告・論考をとりまとめる過程でも明らかになったように、今後のホームステイ研究の方向性について、更なる検討や検証が必要だと模索しているところでもある。読者諸賢からのご批判、アドバイスなどを頂きたいと切に願っている。

なお、本報告は科学研究費挑戦的萌芽研究（課題番号 16K13547 ; H28-30）の助成を受けておこなっている調査の一部となる。本稿をまとめるにあたり、科研協力者であるネクステージ Homestay in Japan の熊谷圭司氏と異文化理解トレーナー熊井知美氏、また RA をつとめてくれている人間科学研究科院生の伊藤駿君の助力を仰いだ。そして大阪観光大学の山口隆子教授からは非常に大きなアドバイスを頂いた。深くお礼を申し上げたい。

## 7. 参考文献

- Bhuiyan, M. H., Aman, A., Siwar, C., Ismail, S. M. & Mohd-Jani, M. F. (2012). 'Homestay accommodation for tourism development in east coast economic region' "American Journal of Applied Sciences" 9(7), pp1085-1090
- Cook, M. H. (2006). 'Joint Construction of Folk Beliefs by JFL Learners and Japanese Host Families.' in M.A. Dufon and E. Chrchill (eds.) "Language Learners in Study Abroad Contexts." Multilingual Matters; Toronto
- Di Silvio, F., Donovan, A. and Malone, M. E. (2014). 'The Effect of Study Abroad Homestay Placements: Participant Perspectives and Oral Proficiency Gains' "Foreign Language

- Annals,” 47(1), pp. 168-188.”
- Iino, M. (2006). ‘Norms of Interaction in a Japanese Homestay Setting: Toward a Two-Way Flow of Linguistic and Cultural Resources’ in M. A. Dufon and E. Chrchill (eds.) “Language Learners in Study Abroad Contexts” Multilingual Matters; Toronto
- Knight, S. M. and Schmidt-Rinehart, B. G. (2002). ‘Enhancing the Homestay: Study Abroad from the Host Family’ s Perspective’ “Foreign Language Annals” 35(2) pp190-201
- Rivers, W. I. (1998). ‘Is being there enough? The effects of homestay placements on language gain during study abroad.’ “Foreign Language Annals” 31 (4), pp492-500.
- Schmidt-Rinehart, B. G. and Knight, S. M. (2004) . ‘The Homestay Study Abroad: Component of Three Perspectives’ “Foreign Language Annals” 37(2) pp254-262
- Shiri, S. (2015). ‘The Homestay in Intensive Language Study Abroad: Social Networks, Language Socialization, and Developing Intercultural Competence’ “Foreign Language Annals” 48(1) pp5-25
- 近藤佐知彦 (2012) 「SS プログラム J-ShIP の一年目 : 新コンセプト超短期日本語プログラムへの挑戦」『大阪大学国際教育交流センター研究論集 多文化社会と留学生交流』 16 pp. 97-106
- 鹿浦佳子 (2007) 「ホームステイにおける日本語学習の効用ーホームステイ、留学生、日本語教員の視点からー」『関西外国語大学留学生別科 日本語教育論集』 第 17 号 pp. 62-112
- 鹿浦佳子 (2008) 「ホームステイする学生は成績がいい！ホームステイをすると成績が上がる？」『関西外国語大学留学生別科 日本語教育論集』 第 18 号 pp. 99-134
- 牧野成一 (1998) 「ホームステイにおける日本語学習効果」 鎌田修・山内博之編『日本語教育・異文化コミュニケーションー教室・ホームステイ・地域を結ぶものー』 pp. 41-61 (財) 北海道国際交流センター
- 港区 (2010) 「ホームステイ及びホームビジットに関する意識調査報告書」『港区産業・地域振興支援部国際化推進担当』 刊行物発行番号 2 1 1 2 6 - 3 2 1 1
- 山口隆子 (2008) 2008 年 「「ホームステイ」誕生の背景と求められた異文化理解ー世界で最初のホームステイ組織・EIL を事例にー」『神戸文化人類学研究』 第 2 号 pp. 30-69. 神戸大学大学院国際文化学研究科文化人類学コース
- 山口隆子 (2012) ホームステイの人類学的研究ーホームステイ組織 The Experiment in International Living の形成と展開ー 博士学位論文 (神戸大学)
- 横田雅弘 (2012) 「ホームステイの効果に関する研究」『学校法人明治大学株式会社 JTB 法人東京産学共同調査研究 2008 年 10 月 1 日~2012 年 7 月 31 日』 研究代表者横田雅弘 (明治大学国際日本学部教授)

〈付記〉

表Ⅰ 成績の記述統計量

変数名	平均値	標準偏差
成績	87.5918	13.2805

表Ⅱ 「宿舎を選ぶ際に重視したこと」に関する記述統計量

変数名	平均値	標準偏差
住居形態	1.8421	0.71279
費用	0.9733	1.69238
広さ・間取り	1.0267	1.66013
プライバシー	1.3867	1.97206
個人専用水回り設備の必要	0.5867	1.32638
ネット環境	1.1067	1.66501
食事	0.88	1.33518
大家との交流	0.1733	0.74204
地域住民との交流	1.56	2.06149
地元学生との交流	1.0133	1.44721
プログラム参加学生同士の交流	0.6	1.17404
立地・通学距離	1.72	1.82742
立地・キャンパス以外との距離	0.6133	1.16124
安全	0.3333	0.87508
家族的な雰囲気	0.72	1.41
言語学習	1.4133	1.73278
学修に集中できる環境	0.473	1.18464
その他	0.24	0.94211

表Ⅲ 「プログラム終了後の目標」に関する記述統計量

変数名	平均値	標準偏差
日本語習得	2.6417	1.88973
日本の大学・研究を知る	1.315	1.78847
単位を在籍校で互換する	0.7533	1.54957
日本・大阪の文化を体験する	2.86	1.78121
日本人の生活を知る	1.5483	1.70785
同年代の日本人と知り合う	0.975	1.53052
様々な年代の日本人と知り合う	0.735	1.20877
プログラム参加学生同士で交流する	0.5133	1.11795
日本で新たな可能性を探す	0.7217	1.33852
関西・大阪を旅行する	0.735	1.31583
日本を旅行する	1.8683	1.37468
その他	0.0933	0.59669

変数名	平均値	標準偏差
費用対効果	3.9783	0.85607
プライバシー	4.5532	0.54408
水回り	4.2826	0.93483
ネット環境	3.7021	1.15936
食事	4.3478	0.76645
住民との交流	3.8085	1.11586
学生との交流	3.9783	1.14483
大学に通うのに便利	3.9149	1.23058
大学以外に出かけるのに便利	3.3404	1.40305
大学の講義以外の学習	4.2766	0.90174
日本の活字を読む	2.7021	1.15936
日本のテレビ番組鑑賞	3.2766	1.39412
日本人の電話会話やネット連絡	2.7447	1.39047
関西・大阪の旅行	4.617	0.67737
日本の旅行	4.2128	1.19667
日本語で会話する機会があった	4.1333	0.94388
日本人の生活を知ることができた	4.1111	0.88478
日本・大阪の文化を体験できた	4.4444	0.65905
日本の大学やその研究を知ることができた	3.4773	1.06724
実践的日本語が身についた	3.7955	0.97836
日本語学習に成果があった	3.9333	0.93905
生活の悩みについて相談できる相手がいた	4.2222	1.02
学習に関して悩みについて相談できる相手がいた	4.1333	1.01354
同年代の日本人と知り合えた	4.1333	0.91949
さまざまな年代の日本人と知り合えた	3.7111	1.21771
プログラム参加者同士で交流した	4.4667	0.84208

表Ⅳ 「生活満足度」及び「異文化理解度」の記述統計量

添付資料 1

1	御校について(学校・学園名)		
2	御校の学校種について		
3	御校の設立母体		
4	御校の留学生受入数(正規生・非正規生をあわせた年間受入数)		
5	回答頂いている方の所属・職責		
6	回答頂いている方のお名前		
7	電子メール		
8	御校ではホームステイでの留学生宿舎の確保をしていますか		
9	はい、ホームステイを留学生宿舎の一部にあてています	いいえ、しかし将来的にはホームステイを採り入れるつもりです	いいえ、ホームステイによる留学生宿舎提供は止めました
9	御校でホームステイを始めた理由は何ですか	ホームステイによる留学生宿舎確保を考えておられる理由は何でしょうか	御校でホームステイを行わない理由は何でしょうか
	学内でホームステイのアレンジをしていますか、それともエージェント(学外の紹介業者など)を使っていますか	学内でホームステイのアレンジをする予定ですか、それともエージェント(学外の業者など)を使いますか	当初ホームステイを始めた理由は何だったでしょうか
	ホームステイと教育プログラムがひも付けされているでしょうか(プログラムで参加者の希望でホームステイが選択できる、もしくは参加者全員をホームステイさせている場合を「ひも付け」とします)	ホームステイと教育プログラムがひも付けされる予定ですか(プログラムで希望者にはホームステイのオプションを用意している、もしくは参加者全員をホームステイさせている計画であれば「ひも付け」とします)	その後ホームステイを中止した理由は何でしたか
	(#1)ホームステイとひも付けされたプログラム名称について教えてください	ホームステイを割り当てる(ひも付けされる)予定のプログラムの実施期間	当時は学内でホームステイのアレンジをしていましたか、それともエージェントを使っておられましたか
	そのプログラムの実施期間	そのプログラムでの年間受入予定人数(計画数)を教えてください	当時ホストファミリーをお願ひする上で重視していたことは何だったでしょうか
	そのプログラムでの年間受入規模(人数)を教えてください	そのうち何人の留学生がホームステイをする見込みですか	マッチングの際に重視していること、またこれまで困ったことなどについて教えてください
	そのプログラムのうち何人の留学生がホームステイをしますか(直近のプログラムの数字、もしくは計画数)	御校では年間を通してどの程度の留学生ホームステイ宿舎を確保する予定ですか	具体的な何か困ったご経験・事例等がありましたら、教えてください
	ホームステイをする留学生はプログラム期間中は同じファミリーに滞在しますか	御校のホームステイプログラムでは食事をつけるつもりでしょうか(1日あたり)	今後ホームステイによる留学生宿舎確保を再開するご予定はあるでしょうか。
	そのプログラムでのホームステイ受入規模(ホームステイ期間かける人数)を教えてください。例えば「20人定員で2ヶ月のサマースクール全員がホームステイなら「40人×月」として下さい。仮に期間中の2週間だけホームステイをする場合は、1ヶ月に切り上げて「20人×月」をお願いします。	ホストファミリーの募集はどのような方法で行うつもりですか	
	(#2)その他にもホームステイとひも付けされた留学生のプログラムがありますか	ホームステイ謝礼(一泊あたり)の設定をどのように予定していますか(月額設定の場合はおおよそ30で割った金額)	上記の理由を教えてください
	そのプログラムの実施期間	御校で留学生対象のホストファミリー登録を受け付ける際、対象のご家庭に関して重視しなければならない、と考えておられることは何でしょうか	
	そのプログラム全体での年間留学生受入規模	宿舎を提供して下さるファミリーについて、御校で想定されているところをお聞かせ下さい	
	そのプログラムでの年間のホームステイ受入規模(ホームステイする人数)	単身家庭(配偶者と死別など)、高齢家庭、若年者、一人親世帯、共働き世帯などを留学生のホストファミリーに登録するについて、御校としての方針があればお聞かせ下さい。	
	そのプログラムのうち何人の留学生がホームステイをしますか(直近のプログラムの数字、もしくは計画数)		
	ホームステイをする留学生はプログラム期間中は同じファミリーに滞在しますか		
	そのプログラムでのホームステイ受入規模(ホームステイ期間かける人数)を教えてください。例えば「20人定員で2ヶ月のサマースクール全員がホームステイなら「40人×月」として下さい。仮に期間中の2週間だけホームステイをする場合は、1ヶ月に切り上げて「20人×月」をお願いします。		
	御校全体で、年間では何人ぐらいの留学生がホームステイで宿舎を確保しているとお考えですか		
	御校留学生全体での年間ホームステイの規模をうかがいます。ホームステイ留学生数およびその期間を掛け合わせて下さい(人×月)。1ヶ月未満のプログラム参加者・ホームステイ留学生は1ヶ月として繰り上げて計算して下さい。(例)2ヶ月間ホームステイをした留学生10人、年間を通してホームステイを続ける者が10人、2週間のサマースクール参加者が7人であれば、2×10+12×10+1×7で147(人・月)として下さい		
	御校の留学生を受け入れて下さるホストファミリー登録数を教えてください。エージェントを使用している場合は該当エージェントが御校に割り当てられるホストファミリー数、もしくは過去の経験から一定時期に運用できたホストファミリー数の最大値をご記入下さい。		
	登録ホストファミリーの募集はどのような方法で行っておられますか		
	ホームステイの謝礼(一泊あたり)の設定(月額設定の場合はおおよそ30で割った金額)		
	御校で登録しているホームステイでは食事はつきますか(1日あたり)		
	ステイ先として登録して下さったご家庭について、御校でお考えのところをお聞かせ下さい		
	御校で留学生対象のホストファミリー登録をする上で、対象のご家庭に関して重視していることは何でしょうか		
	単身家庭(配偶者と死別など)、高齢家庭、若年者、一人親世帯、共働き世帯などが留学生受入を希望された場合、御校ではホストファミリーとして登録を受け付けますか。御校として方針や、これまでのご経験があればお聞かせ下さい。		
	これまで困ったトラブルなどについて教えてください。		
	具体的に何か困ったご経験・事例等がありましたら、教えてください。		
	今後もホストファミリー登録を増やしたり、ホームステイによる留学生宿舎確保を進めていくつもりでしょうか。		
	上記の理由を教えてください		
	ホームステイ運営について、これまでのご経験からお気づきになったところを教えてください。		
	ホームステイでは異文化理解・外国語習得・ソーシャルスキル獲得などの教育効果があると考える関係者もおります。御校ではどのようにお考えでしょうか。		
	留学生のホームステイと、ネット等による「民泊」による外国人受入とは、宿舎の形態として相違しているとお考えでしょうか。		
	「留学生ホームステイ」に関して、御校以外についてご存知の情報があれば、ご教示いただくと有り難いです。本アンケートについてご意見、連絡事項などがございましたらご記入下さい。ご協力本当に有り難うございました。		



添付資料 2

Accommodation Survey for Osaka Summer Institute

2017/06/19

大阪大学(近藤佐知彦)は留学生宿舎について学術振興会の科学研究費助成を受けて調査研究に取り組んでいます。ご面倒をおかけ致しますが、今回大阪の夏のプログラムに参加するにあたり、以下の質問に答えて頂けますよう、どうかよろしくおねがいいたします。

Kondo Sachihiko (Osaka University) is currently granted for his research on the international student accommodation by JSPS. At the very beginning of your summer institute, it will be very helpful for us, if you are answering questions below. We really appreciate spending your 3-4 minutes to fill out the survey.

近藤佐知彦 Sachihiko Kondo

名前 \_\_\_\_\_ 国籍 \_\_\_\_\_ 大学名 \_\_\_\_\_  
 Name \_\_\_\_\_ Nationality \_\_\_\_\_ Home University \_\_\_\_\_

夏の留学で宿舎を選ぶ時には何を重視しましたか。順に 5 つあげてください。

Deciding your accommodation for your summer institute, what did you prioritize most? **Number your top five concerns** amongst the below.

- ( ) 費用 cost
- ( ) 広さ・間取り space for individuals
- ( ) プライバシー privacy
- ( ) 個人専用水回り設備の必要 necessity for personal bathroom / kitchen facilities
- ( ) ネット環境 free internet
- ( ) 食事 food / meal plan
- ( ) 大家との交流 interactions with land-load
- ( ) 地域住民との交流 interactions with local Japanese people
- ( ) 地元学生との交流 interactions with local (Japanese) students
- ( ) プログラム参加学生同士の交流 interactions amongst program participants
- ( ) 立地・通学距離 accessibility to campus
- ( ) 立地・キャンパス以外との距離 accessibility to destinations other than campus
- ( ) 安全 security
- ( ) 家族的な雰囲気 at-home atmosphere
- ( ) 言語学習 studying Japanese
- ( ) 学修に集中できる環境 living conditions for pursuing research / study
- ( ) その他 Others (Specify)

今回の留学の成果としてあなたが重視していることは何でしょう。順に 5 つあげてください。

What you expect the most for outcomes of your studying abroad in this summer? **Number your top five priorities** amongst the below.

- ( ) 日本語習得 to study Japanese
- ( ) 日本の大学・研究を知る to experience one of the Japanese universities / research environment
- ( ) 単位を在籍校で互換する to transfer Osaka Summer Institute credits to home institutions
- ( ) 日本・大阪の文化を体験する to experience Japanese / Osaka culture
- ( ) 日本人の生活を知る to understand Japanese way of life
- ( ) 同年代の日本人と知り合う to make Japanese friends of my own generation
- ( ) 様々な年代の日本人と知り合う to make Japanese friends of various generations
- ( ) プログラム参加学生同士で交流する to interact amongst program participants
- ( ) 日本で新たな可能性を探す to search future directions of my own research / life in Japan
- ( ) 関西・大阪を旅行する to travel Kansai / Osaka region
- ( ) 日本を旅行する to travel in Japan
- ( ) その他 Others (Specify)

Your program (tick the appropriate)

- J-ShIP
- FrontierLab Summer

Your accommodation type in summer 2017 (tick the appropriate)

- home-stay
- apartment (single occupancy flat)
- dormitory
- other ( )

添付資料 3

## Accommodation Survey for Osaka Summer Institute

August 2017

大阪大学(近藤佐知彦)は日本学術振興会の科学研究費助成を受けて留学生宿舎について調査研究に取り組んでいます。ご面倒をおかけ致しますが、今回大阪の夏のプログラムを修了するにあたり、以下の質問に答えて頂けますよう、どうかよろしくおねがいたします。

Kondo Sachihiko (Osaka University) is currently granted for his research on the international student accommodation by JSPS. Completing your summer institute, it will be very helpful for us, if you are answering questions below.

近藤佐知彦 Sachihiko Kondo

名前 \_\_\_\_\_ 母校 \_\_\_\_\_  
 Name \_\_\_\_\_ Home University \_\_\_\_\_

夏の留学中の宿舎に関して、あなたは以下の項目にどの程度満足していますか。  
**To what extent have you been satisfied with Your Summer Institute Accommodation?**

	Not Satisfied			Satisfied	
	1	2	3	4	5
費用対効果 Cost Performance	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
プライバシー Privacy	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
水回り設備の使い勝手・清潔 Usability / Cleanness of Kitchen / Bath-room	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
ネット環境 Internet Access	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
食事 Meal / Food	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
住民との交流 Interactions with Local Community	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
学生との交流 Interactions with Local Students	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
大学に通うのに便利 Accessibility to Campus	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
大学以外に出かけるのに便利 Accessibility to Destinations other than Campus	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>

夏の留学期間中、あなたは日常的に以下の活動を楽しみましたか。  
**To what extent have you enjoyed activities below?**

	Very Scarcely			Very Often	
	1	2	3	4	5
大学の講義以外の学習 Learning something outside the Class-room	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
日本の活字（新聞や本）を読む Reading Japanese Texts (Newspaper / Books)	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
日本のテレビ番組鑑賞 Watching Japanese TV Programs	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
日本人との電話会話やネット連絡 Telephone / e-mail communications with Japanese	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
関西・大阪の旅行 Traveling Kansai / Osaka Area	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
日本の旅行 Traveling Japan	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>

《Fill-out the other side, please》

あなたの学修成果やその過程について、もっとも当てはまる項目はどれでしょう。

**Choose the most appropriate, concerning your learning process and outcome.**

	No, not at all			Yes, indeed	
	1	2	3	4	5
日本語で会話する機会が多かった Sufficient Opportunities to Communicate in Japanese Language	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
日本人の生活を知ることができた Understood Real Japanese Life	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
日本・大阪の文化を体験できた Experienced Japanese / Osaka Cultures	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
日本の大学やその研究を知ることが出来た Understood Japanese University and Research	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
実践的日本語が身についた Learned Practical Japanese communication skill	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
日本語学習に成果があった I have sufficiently studied Japanese in summer	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>

夏の期間中の学習中の悩み事などについてどのようなサポートが期待できましたか。

**What kind of supports you could expect in summer, in order to deal with difficulties.**

	No, not at all			Yes, indeed	
	1	2	3	4	5
生活の悩みについて相談できる相手がいた I had someone to consult with on Daily Problems.	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
学習に関して悩みについて相談できる相手がいた I had someone to consult with on Academic Issues.	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
同年代の日本人と知り合えた I got to know Japanese of my own generation.	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
さまざまな年代の日本人と知り合えた I got to know Japanese of various generations.	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
プログラム参加者同士で交流した I interacted amongst Program Participants	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>

**【For Home Stay Students Only】**

ホームステイでの経験について、以下の項目はあなたにどの程度当てはまりますか。

**Choose the most appropriate for your homestay experience.**

	No, not at all			Yes, indeed	
	1	2	3	4	5
ホストファミリーと十分な交流ができた I sufficiently communicated with Host-family	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
ホストファミリーはフレンドリーだった My Host-family was friendly	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
食事はホストファミリーと一緒に食べた I always had meals with Host-family	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
ホームステイ先の食事は美味しかった Meals at Host-family are Delicious	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
ホームステイ先の設備は良かった Facilities are all well equipped	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>

宿舎に注文はありますか・Any Suggestions?

【事例紹介】

# TUT グローバルハウスでの 生活を通じた学びとつながり

Learning and Building Relationships through a Life in  
TUT Global House

豊橋技術科学大学 グローバル工学教育推進機構 国際交流センター 特任助教 蒲原 弘継

KAMAHARA Hirotsugu

(Center for International Relations, Institute for Global Network Innovation in Technology  
Education, Toyohashi University of Technology)

キーワード：シェアハウス型混住宿舎、TUT グローバルハウス、グローバル技術科学アーキテクト、  
外国人留学生宿舎

## はじめに

近年、大学におけるグローバル人材育成の場として日本人学生と留学生が共同生活を行う混住型宿舎が注目されている（牧田 2013）。日本人学生にとって留学生との共同生活は日本にいながら行える実際の海外経験に最も近い国際交流経験と考えられる。また、経済的な問題などから長期の留学に踏み込めなかった日本人学生にとって、留学生と長期に渡り交流できる機会が得られる混住型宿舎は魅力がある。一方、留学生にとっては日本での留学経験において日本の社会・文化について学ぶ機会としての日本人学生との共同生活は絶好の機会となりえる。

このような側面から見ると良いことしかかのように見える混住型宿舎であるが、実際の運用においてはいくつかの課題が報告されている。出口・八島（2008）は、大学寮における留学生と日本人の対人関係を調査し、日本社会にある上下関係の実践や規範が留学生の寮コミュニティへの参加を阻んでいると指摘している。日本人特有の集団主義や高コンテクストといった社会文化は留学生の日本留学における適応上の課題としていくつかの研究（下田・田中 2007、Lee 2017）が指摘している。一方、山川（2013）は、寮生活において、「ルール」、「空間」、「時間」の3つの共有が日本人学生と留学生の友人関係を促進すると指摘している。加えて、正宗（2015）は、留学生が日本人学生と「対等な立場」

であることを認識することにより、留学生が共同体の一員としての役割を果たすことになったと述べている。さらに、こうした環境をいかに生み出すかについては、「自分たちで決めたルールの共有」、「異文化理解関係のカリキュラム」、「留学生との交流を推進するキャンパスの環境」などが寮に住む日本人学生の態度に影響しているのではないかと考えられている（正宗 2015）。したがって、このような社会文化的な課題は宿舎のみで解決できるものではなく、教育カリキュラムを含めた大学生活全体において取り組むべき課題といえる。このように、単に混住型宿舎を建設するのみならず適切な運営管理と教育プログラムが必要であることはいくつかの事例（望月（2013）、吉田（2015））においても指摘されている。本稿では、こうした課題を念頭に、豊橋技術科学大学がスーパーグローバル大学創生事業「グローバル技術科学アーキテクト」養成キャンパスの創成<sup>1</sup>の一環で取り組んでいる「TUTグローバルハウス」について報告する。

### 豊橋技術科学大学の特徴

豊橋技術科学大学は高等専門学校（以下、高専と記す）出身の3年次から編入学した学生が全学生数2,087名（2017年5月1日現在）の約8割を占める国立大学である。こうした学生の出身高専の多くは学生寮を有しており、それらの高専の中には1年生は全寮制という高専もある。また、留学生数名が在学し、日本人学生と同じ寮生活を送っている高専もある。筆者も高専（大分高専）の出身であり、国際交流をするきっかけはその時の寮生活での留学生との交流を通じてであった。当時の高専では特に国際交流イベントが開催されるなどの機会はなかったが、高学年（4、5年生）の時に個室に居住していたインドネシア人留学生と知り合い、インドネシア語-日本語のランゲージエクステンションをした経験はその後、今日の国際交流の経験に至る一つのきっかけになっている。このように、ある程度の国際交流と寮生活の経験のある学生が豊橋技術科学大学に編入学していると推察できる。また、全国の高専から学生が集まるため、学生の地域的な多様性が高いことも特徴の一つである。

現在、豊橋技術科学大学には193名（全学生数の9%）（2017年5月1日現在）の留学生が在籍している。他大学では中国、韓国からの留学生が大多数を占める一方、豊橋技術科学大学ではマレーシアからの留学生が最も多く62名（全留学生数の32%）、次いで、インドネシア33名（全留学生数の17%）、ベトナム29名（全留学生数の15%）であり、東南アジア圏の学生が占める割合が多い。また、英語で修士や博士の学位が取得できる国際プログラムを開講しており、国費や国際協力機構（JICA）等の奨学金を得た留学生をはじめ、ドイツ シュツットガルト大学とのダブルディグリープログラムや中国 東北大学とのツィニングプログラム等による交換留学の留学生も多数在籍している。したがって、学部4年次で研究室に配属されるとアジアをはじめヨーロッパや中南米、中東、アフリカ出身の国際プログ

<sup>1</sup> 豊橋技術科学大学 スーパーグローバル大学創成事業の詳細は、ホームページ（<http://www.sgu.tu.t.ac.jp/index.html>）を参照されたい。

ラムの留学生が研究室に所属している場合もある。こうした国際的なキャンパス環境をさらに促進させるスーパーグローバル大学創成事業「グローバル技術科学アーキテクト」養成キャンパスの創成の取り組みが2014年からはじまっている。学内に新たにスーパーグローバル大学創成事業推進本部および推進室<sup>2</sup>が設置され、学内の関係する教職員と連携しながら事業が展開されている。そして、この事業の核となるのがグローバル技術科学アーキテクト養成コースの新設である。

### グローバル技術科学アーキテクト養成コース

豊橋技術科学大学ではグローバル社会の多様性を理解し、異なる文化・価値観をもつ人々と共に課題を共有し、社会との接点の中で技術を捉えて課題を分析するとともに、解決策を創造し、判断と意思決定を行い、具体的な「ものづくり」に導くことが出来る人材の育成を目指している。このような人材を、豊橋技術科学大学では「グローバル技術科学アーキテクト」と呼んでいる。将来、こうしたビジョンを有して世界の舞台で活躍したい意欲のある日本人学生と留学生を同時に募集し、学部から大学院博士前期課程（修士）までの新たな特別コースである「グローバル技術科学アーキテクト養成コース（以下、GACと記す。）<sup>3</sup>」を2017年4月に新設した。

コース規模としては、学部1、2年は各学年15名、学部3、4年は各学年65名、博士前期課程は各学年65名の、総数290名としている。1年次入学は、入学定員80名のうち15名を本コースに割り当て、主にASEAN出身の留学生を想定している。一方、高専卒業の3年次編入生は、入学定員360名のうち50名を本コースに割り当て、その内、35名を日本人、15名を留学生としている。これにより、コースの学生総数は日本人140名、留学生150名となる予定である。

本コースは、1) グローバル・コミュニケーション能力、2) 多様な価値観の下での課題解決能力、3) 世界に通用する人間力、の3つの能力を養うカリキュラムで構成されている。本コースにおいては、専門科目をはじめとした講義をバイリンガル化し、グローバル・コミュニケーション能力を強化する。ここでのバイリンガル講義は、教科書・プレゼンテーション資料・板書などは英語で、講義・質疑・討議・試験は日本語と英語を併用し実施している。また、語学力の向上に向け、日本人学生に対する英語力強化および留学生に対する日本語力強化カリキュラムを提供している。さらに、グローバル実務訓練が必修科目となっており、本コースに所属する学生全員が学部4年次の1月から2月までの2ヶ月間（長期の場合であれば6ヶ月間）、非母国語圏の企業等で過ごすことになる。コース修了の認定要件として所定の単位を取得することに加え、日本人学生はTOEIC730点相当以上を、また留学生は日

<sup>2</sup> 推進本部については豊橋技術科学大学 ホームページ (<https://www.tut.ac.jp/news/141105-4285.html>) を参照されたい。また、推進室は室長である高嶋 孝明教授をはじめ、筆者を含む学内教員と関係する職員がメンバーとなり TUT グローバルハウスを含む一連の事業を推進している。

<sup>3</sup> 豊橋技術科学大学 グローバル技術科学アーキテクト養成コースの詳細は、ホームページ (<http://www.sgu.tut.ac.jp/admission/index.html>) を参照されたい。

本語能力試験 N1 相当以上を取得することを定めている。そして、GAC に所属する学生全員に対して学部在籍時に混住型宿舎で生活する生活・学習プログラムを修了時のコース認定のための必須条件としている。

### 計画立案から宿舎建設まで

これまで、豊橋技術科学大学の大学構内には 600 戸を有した学生宿舎があり総学生数の約 3 割が居住していた。これらの学生宿舎には既に留学生と日本人が混住しており、フロアごとに共同のトイレや調理室、洗濯機がある。したがって、これまでの学生宿舎にはないコンセプトで GAC の学生全員が生活する混合型宿舎を約 180 戸新規に建設するにあたり、交流協定校であるニューヨーク市立大学クイーンズ校にあるインターナショナルハウス「SUMMIT」<sup>4</sup>を参考にして、シェアハウス型混住型宿舎を計画するに至った。

具体的な建物の計画コンセプトをさらに明確にするため 2015 年 2 月 18 日に学内コンペを実施した。その結果、最優秀賞は、建築・都市システム学課程 3 年次の学生からの提案である「縁 ～つながり～」が選ばれた<sup>5</sup>。このコンセプトを活かして、5 人で 1 ユニットのシェアし、1 棟 6 ユニットの 30 名収容の建物 6 棟と集会棟 1 棟（写真 1～3 参照）の建設を計画した。これらの建物は、キャンパス内の学生宿舎エリアに配置することとし（写真 4 参照）、最初の 2 棟と集会棟 1 棟が平成 29 年 3 月に完成した（写真 5 参照）。既に、2017 年 4 月より入居を開始しており、平成 30 年度末までに残りの 4 棟を建設する予定である。

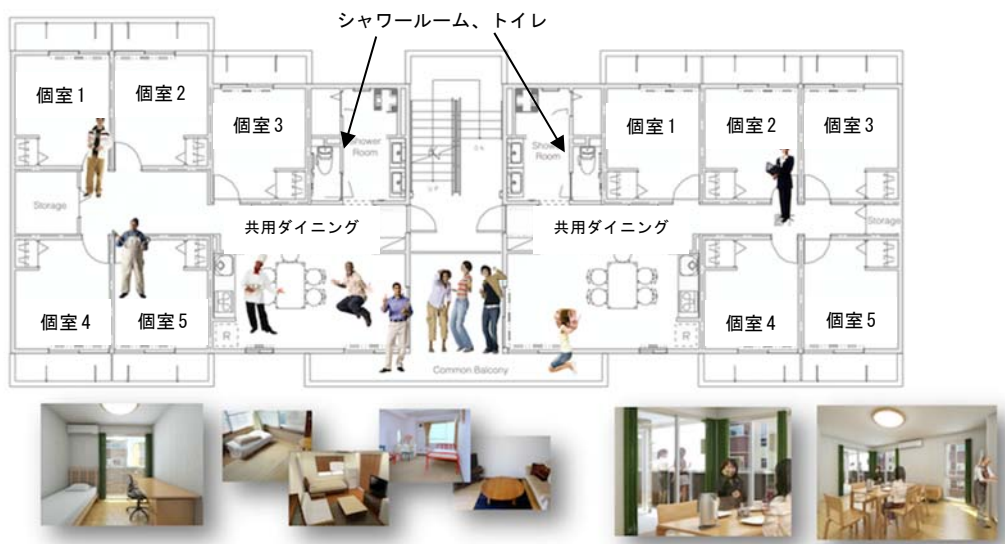


写真1 フloorプランと生活イメージ

<sup>4</sup> ニューヨーク市立大学 クイーンズ校 Summit Apartment の詳細は、ホームページ (<http://queens.collegehousing.com/>) を参照されたい。

<sup>5</sup> 学内コンペの詳細は、豊橋技術科学大学 ホームページ (<https://www.tut.ac.jp/news/150224-4488.html>、<http://www.sgu.tut.ac.jp/student-life/news/67.html>) を参照されたい。



写真2 広がるつながり「縁」をイメージした建物配置



写真3 エリアプラン



写真4 豊橋技術科学大学の航空写真と TUT グローバルハウスの位置





写真5 TUT グローバルハウスの外観

### 組織運営と宿舎プログラム

TUT グローバルハウスの運営をはじめるときに、ハウスマスターを国際公募により募集し、2017年2月から1名（日本人）が勤務している。ハウスマスターは、平日の午後から夕方に TUT グローバルハウスの集会棟内に設けた事務室に勤務し、建物管理に関する一般的な事務対応とレジデントアシスタントとのミーティングや業務日誌の確認等を行っている。また、レジデントアシスタントは各ユニットから1名が選出され、ユニット内での共同生活等の取りまとめ役を担っている。さらに、各棟のレジデントアシスタントの中から1名を棟長に選出し、棟長を中心としてハウスマスターとレジデントアシスタントが参加する TUT グローバルハウスの運営に関するミーティングを毎月開催している。宿舎内のルールに関しては、レジデントアシスタントを中心としたユニット内の話し合いによって各自で決めるようにしている。ここでのルールは単に掃除の分担やゴミ出しといったことだけではなく、週の何日かを英語で会話する日とするといった学習面でのルールを定めているユニットもある。

これまでに、報告されたユニット内で起こった問題としては、ハラルに関するトラブル（例えば、使用する食材に関する誤解等）や共有スペースの光熱水費に関する要望（例えば、水を使いすぎないでほしい等）などがある。こうした問題も各ユニット内での話し合いやハウスマスターを交えた話し合いなどにより対応できている。また、こうした問題にいかに対応するかも学生にとっては一つの「学び」といえる。TUT グローバルハウスにおいては、こうした日常生活で起こる問題への対応に加え、学内イベントの開催や地域との交流までを生活・学習プログラムとして学生に課している。2017年前期の学内イベントとしては、GAC 学生全員が既存の国際交流センター主催の学内国際交流イベントである世界の EXP02017（2017年6月30日実施）の運営の一端を担っている。

## まとめと今後の展望

本稿では、豊橋技術科学大学が大学全体で取り組んでいるグローバル技術科学アーキテクト養成コースとそのコース生全員が生活するTUTグローバルハウスの取組みについて紹介した。気になる学生達の声であるが、豊橋技術科学大学の広報誌である「天伯」にハウスマスターとTUTグローバルハウスの棟長やTUTグローバルハウスで生活している留学生のコラム（山崎・本保 2017、Lim 2017）が掲載されているのでそちらをご一読いただきたい。また、コースを開設したばかりということもあり、留学生の獲得は目下の課題である。2018年4月からはGACの1年次15名が入学し、TUTグローバルハウスの活動もいよいよ本格化を迎える予定である。今後、学生には、将来、世界のどこにいても連絡を取り合うような親友としてのつながりをTUTグローバルハウスでの共同生活を通じて築き、世界の舞台での活躍を期待したい。

## 参考文献

- Lee, J. S. (2017). Challenges of International Students in a Japanese University: Ethnographic Perspectives. *Journal of International Students*, 7(1), 73.
- Lim, J. Y (2017) New Chapter in My Life at TUT、天伯、144(26) (<https://www.tut.ac.jp/tempaku/04/index.html#p10363>)
- 下田薫菜、田中共子 (2007) 在日外国人留学生の感じる文化間距離：集団主義-個人主義、高-低コンテキストの観点から、*留学生教育*、12、pp. 25-36.
- 出口朋美、八島智子 (2008) 実践共同体としての大学寮における留学生と日本人学生の対人関係、*多文化関係学*、5、pp. 33-47.
- 牧田綾子 (2013) グローバル人材育成の場としての「国際寮」、*カレッジマネジメント*、31(6)、pp. 6-11.
- 正宗鈴香 (2015) 寮生活における留学生の異文化社会適応、人格形成、言語習得に関する事例研究-国際寮の教育的機能の可能性-、*麗沢大学紀要*、98、pp. 63-72.
- 山川 史 (2013) 寮に住む留学生と日本人学生の友人関係構築、*異文化間教育*、38、pp. 100-115.
- 望月由起 (2013) 学生寮の機能多様化と大学のストラテジー、*カレッジマネジメント*、31(6)、pp. 24-29.
- 山崎正義、本保雄太 (2017) TUT グローバルハウス始動、天伯、144(26) (<https://www.tut.ac.jp/tempaku/01/index.html#p10335>)
- 吉田千春 (2015) 留学生宿舎から混住型学生宿舎へ-教育寮への転換に向けて-、*留学交流*、54、pp. 9-23.

【事例紹介】

## 増え続ける外国人留学生の住環境問題、課題の解決

—大学と提携することで、教職員の負担を軽減、  
留学生の生活環境を向上させる—

Solving Problems and Issues of Living Environment: Improve the Living  
Environments of International Students ~Lighten the Burden of the  
Staff of a School by Cooperating with University~

株式会社グローバルトラストネットワークス代表取締役 後藤 裕幸

GOTO Hiroyuki

(President & Chief Executive Officer, Global Trust Networks Co.,Ltd.)

キーワード：外国人専門賃貸住宅家賃保証、外国人留学生宿舎

### 1. はじめに

当社グローバルトラストネットワークス（以下、GTN）は、「外国人が日本に来て良かったをカタチに」という理念のもと、外国人専門の「住」周りをメインに事業を展開し今年の7月で12期目を迎えた。外国人専門の賃貸住宅保証サービスからスタートし、不動産賃貸仲介事業を開始。その後、就労問題を解決するための人材紹介事業、通信事業にも着手し外国人専門の携帯電話サービスを手掛けている。

海外拠点の1つであるベトナムでは日本への留学生を健全化するために単独出資で進出を果たし現地学生の送り出し事業を展開している。

ご存知のように、政府は2020年までに外国人留学生を30万人に増やす目標を掲げ、積極的な受入れ姿勢を見せており、日本で暮らす外国人は今後ますます増えていく。国をあげて外国人の受入れを強化する方針の一方、法務省が3月に発表した「外国人住民調査報告書-改訂版<sup>1</sup>」によると、日本で家を探したことのある外国人2,044人のうち、約4割が日本語での会話に支障がないにもかかわらず外国人であることを理由に入居を断られ、また同様に4割が日本人の保証人がいないため入居を断られた経験があると回答している。

<sup>1</sup> <http://www.moj.go.jp/content/001226182.pdf>

現在多くの外国人が日本語や日本文化に興味を持ち来日しているが、現在の日本には外国人を受け入れるための環境が先に述べた住環境だけに留まらずまだまだ整備されていない。制度の不備、心理的な抵抗感など彼らが気持ちよく暮らすために解決すべき問題が積みあがっている。

せっかく日本に興味をもち、大切な時間・お金をかけて来たのだから日本を好きになってほしい。日本のよさを広めてほしい。日本に来て良かったと心から思ってもらえる社会をつくりたい。そのために当社は現在大きく分類して5つのサービスを展開している。

- ① 外国人専門の賃貸住宅家賃保証・家探し仲介事業
- ② 電話相談窓口を通じた生活サポート
- ③ 外国人専門のアルバイト紹介・就職支援
- ④ 外国人専門の携帯電話サービス
- ⑤ 外国から日本への留学生送り出し

そのうち、本稿では外国人留学生の宿舍支援に係る事業について、紹介する。

## 2. 外国人留学生賃貸住宅事業の現状

日本における外国人居住者は291万人（2016年12月）であり、これは外国人居住者が急増しはじめた1990年代と比較すると約3倍（法務省・在留外国人統計）となっている。

留学生数は政府が平成20年に留学生30万人計画を策定してから7年経った現在、23万人を超え、2020年の30万人という目標に向けて更に増加と多国籍化が予測される。

外国人留学生の宿舍の現状としては、約25%が公的宿舍等に住み、約75%の学生が民間宿舍やアパートに入居し生活している。もっとも多い滞在スタイルとして民間賃貸住宅が挙げられるが、外国人留学生にとって賃貸借契約を結ぶことは経済的、また保証人が必要であるなどの商習慣が大きなハードルとなり非常に難しい。

公的宿舍、いわゆる学生寮・ドミトリーを増やせればよいのだがその場合の管理は大学となる。何かトラブルがあった場合、例えば水がでない、ガスが止まったなどの軽微なものから水漏れで階下の住民から苦情が出たなどの大きなものまですべて大学の職員が対応にあたらなければならない。トラブルの解決のみならず言語の問題もあり、留学生が増え続けている中、大変な労力と時間がかかり、負担となっている。

また学生寮の使用は多くの大学で入居期間が1年間と決まっており以降は自分で部屋を探さなくてはならず、その相談もまた大学が窓口となる。大学が機関として留学生の保証人を引受ける場合、留

学生住宅総合保障制度<sup>2</sup>を利用するが、この制度の窓口も大学となる。

多くの大学の留学生担当部署が少人数での対応を任されているが、今後さらに留学生が増えることはほぼ決定しており、留学生が何千人にもなると対応しきれず委託したいという要望がでてくる。

当社の大学への取り組みは2011年の早稲田大学の留学生への保証から始まり、2017年8月現在42校と提携している。大学が抱えている問題はどこも同じであることと、ほぼゼロコストでのアウトソーシングが可能となるため、すでに提携していただいた学校様からご紹介いただくということが多く、また何かの折に話を聞き提携を検討したいという新規の問合せも増えている。

大学に通われている留学生の場合、滞納等の事故率が非常に低いため、提携大学所属の方には留学生（正規生）に加えて、留学生住宅総合保障制度では対象外の研究生（非正規生）・教職員の方々にも通常は家賃の50%となる保証委託手数料を、30%でご利用いただいている。

インターネットの接続、ライフラインの設定からトラブルの解決、大家さんからの入居者への注意事項の伝達なども多言語でサポートしているため教職員の方の負担は大分軽減されているのではないだろうか。

現在までの当社への累積保証申込者数は80,000件にのぼるが全体の利用者の約58%が留学生で、残りの42%が経営者を含めた就労者である。毎月3,000件のサポート依頼を受けているが、8割はその日のうちに、残り2割もその月のうちに解決している。解決が早い理由として、外国人従業員が従業員全体の70%を占め、14ヶ国の人間が集まっていること、そのほとんどが3言語以上を話し不動産業界のプロフェッショナルとしての知識を有しているという当社の特徴が挙げられる。

サービスとしても、英語・中国語・韓国語・ベトナム語・ネパール語・ポルトガル語・タイ語にネイティブ対応しており全く日本語の話せない方でも意思疎通が可能なこと、完全なネイティブではないがアラビア語等にも対応しており、の来日者数は多くはないが、だからこそ対応の難しい言語の対応ができるスタッフも揃っている。

入居中のトラブルへのサポートはその国の文化を理解していないとなかなか納得しての解決には結びつかないといわれるが、当社のメンバーは入居者からすれば日本生活の先輩にあたるため、たとえばゴミの出し方のルールにしても、“母国ならこうだけど、日本ではこういうルールなので守ってね”と母国の違いと日本のルールを教えることができる。そのため、日本人が一方的に日本のルールを説明するのに比べてかなり受け入れやすいこと、また親身になって相談に乗ってくれた先輩に迷惑をかけたくないという意思が働いているようだ。

そして、ホームページでは、中国語やベトナム語など6ヶ国語で書かれた「日本のアパートの暮らし方」を漫画で紹介している。代理店には「外国人入居者向け賃貸住宅入居ガイドDVD」を無料で配

<sup>2</sup> <http://www.jees.or.jp/crifs/>

布している。こちらも6ヶ国語対応なので契約時に日本の賃貸習慣の理解を深めることに役立ててもらっている。

契約に必要な審査の特徴としては、連絡先である親に電話をし我々を認識してもらうことを必須事項としていることが挙げられる。ご両親にはお子様が日本で住居を借りるための申請をしていること、通常は日本に住む保証人が必要なことをもちろん母国語で説明し、ご家族の代わりに当社が機関保証をする旨を伝えている。その際お子さんと連絡がとれないときは、ご両親にご協力いただきたいということ、その一方でお子さんが日本で生活する上で困った時は何でも言ってほしい、われわれが里親のような役目も果たすので、心配しないでほしいという話をする。

連絡手段が発達し、飛行機で行き来できる時代になったとはいえ、遠くはなれた国にいる子供はやはり心配であり、大学だけでなくいくつかの連絡先、そして日本語でなくとも連絡の取れる場所があるというのは大きな安心となる。この時点でしっかりと信頼を得ることで、私たちに任せよう、なにかあったときは協力しようと思っただけ。

一方で、入居者からすると、ご両親に連絡が行くというのは、家賃の滞納があった時など親御さんに知られてしまうのは恥ずかしいことでもあり、そのあたりが家賃をきちんと払おうという気持ちにも繋がっていく大きなポイントになっている。

おそらく他の日本の保証会社で積極的にここまでのコミュニケーションを取っているところはなく、仮に該当者が帰国していても連絡に困らないというのは当社の強みである。

留学生の生活環境の向上のためにも、また大学側の負担を軽減し本来の学業への支援に力をいれていただくためにも、貢献できるのではないかな。

### 3. 保証の詳細・利用の流れ

#### ●利用の流れ/大学様

大学様はGTNとパートナーシップを組むのみで費用は発生しない。

当社担当のお渡しするパンフレット等を設置いただく。

大学様によってはHP上で当社を推奨企業としてご紹介いただいているケースもある。

#### ●賃貸物件契約の流れ/学生

##### ■A, 不動産会社や仲介会社を通して契約する場合

①大学のご担当者様が学生にGTNのパンフレットやチラシを持参して不動産会社へ相談に行くように指示。 ※大学ご担当者さまが関与するのはここまで。

②学生からパンフレットを受けとった不動産会社がGTNもしくは地域の提携企業へ問い合わせる。

③GTN保証を使用している不動産会社であればそのまま家探し、GTN保証を利用していない不動産

会社であれば当社の担当が制度説明をする。

※学生と不動産会社で保証を含めた契約を結ぶ。

■B. 学生と大家様が直接契約をする（大学が不動産会社に近い役割を担っている）場合

- ①大学に GTN の保証申込書及び保証契約書類を設置、学生に保証機関の説明を行う。
- ②学生は物件契約時に GTN 保証にも申込、初回保証料は学生が GTN へ直接送金する。
- ③契約時に学生から大家様に書類をお預けし、大家様から GTN に書類を送付いただく。

※A の場合に比べ、大学ご担当者様・学生・大家様のいずれも一工程増えるため、不動産会社が間に入ることをおすすめしている。

申込時に必要なのは、「在留カード」「学生証」プラス緊急時の連絡先として本国のご家族、原則ご両親、と日本国内の連絡先の2ヶ所で、国内の連絡先は国籍不問で日本語が話せない方でも構わないこととしている。

連帯保証人ではなく連絡先のためハードルが低く、日本でできた友人、先輩、ゼミの教授に連絡先をお願いしている留学生が多い。

【GTN 保証 (TRUST NET21)】

連帯保証人	不要
保証委託料	月額賃料の 50% ⇒ 提携大学 30%
最低委託料	20,000 円/首都圏以外 15,000 円 (2 年目以降 10,000 円)
保証金額	月額賃料×48 ヶ月
保証期間	契約から退去明け渡し完了まで

【TRUST CALL (ライフサポート)】

入居時サポート	審査時における生活指導及び情報確認 解約手続きサポート 契約同行、退去立会いサポート (有料・首都圏のみ)
生活サポート	電気、ガス、水道の利用開始における電話サポート ゴミだし、騒音などのトラブルサポート 連絡先の変更、長期不在時の連絡サポート

※電話、メール、FAX、SNS でのサポート

一部の大学では通常保証に加えてサービス範囲を拡大 (別途料金) して対応している。

- ・住民登録・健康保険申請サポート・銀行口座開設
- ・病院帯同および通訳
- ・留学生向け住まいに関するオリエンテーション開催
- ・空港ピックアップ 等

#### 4. 日本のルールをわかりやすく伝えるために

入居者向けマナー・ルール説明ツール

「WEB マンガで見る日本の賃貸事情 (日本語、英・中・韓・ベトナム・ネパール語)」

日本の集合住宅での生活をスタートした主人公「グローバル・ジョン」。近所の方たちとの接し方・マナーなどを織り交ぜたストーリーを理解しやすいよう Web 漫画として HP 上で公開。

「外国人向け賃貸住宅入居ガイド DVD（日本語、英・中・韓・ベトナム・ネパール語）」

生活サポート部署に寄せられた相談を元に作成した入居者向け賃貸住宅のルール・マナー動画。  
入居時に理解を促進することでトラブル防止につながるチェックポイントをコンパクトにまとめた。

（理解度を確認するチェックリストも用意。活用いただくことでトラブル防止を更に向上させることができる。）

## 5. ご参考：相談として多い事例

- ①安否確認：学校を長期で休んでいる留学生。帰国しているケースが多いため GTN からご本人及びご家族に積極的に連絡を取り、大学、家主へ現状報告。
- ②複数入居：契約者が申し込み時の告知と異なる複数の留学生と一緒に住んでいる。⇒契約者以外速やかに退去を促す。
- ③また貸し：契約者が別の誰かに貸しており家賃も別名義で入金されている。契約当事者がいないため約束事が履行されない。⇒経緯を確認。韓国の家賃制度のように善意で次の入居者を入れている場合もあるため、一概に退去手続きではなく、大家様次第では新しく契約を締結しなおすケースもある。
- ④ゴミ出し分別：ゴミ出しのルールが守られていない。分別されていないため清掃局も収集しない。⇒入居時の説明不足、理解不足のため、改めて生活ルール指導を行い理解度を確認。

現在海外3ヶ所に拠点を設置しているが今後はアジアを中心に更に拠点を増やし、ゆくゆくは日本人が世界にでていけるような仕組みも作りたいと考えている。そのときに日本で当社を利用した留学生と海外で新しい関係を築いていくことができれば幸いである。

外国人が日本に来て良かったと心から思ってもらえる環境を整えるために、企業としていっそう力を尽くして行きたいと考えている。



【海外の教育事情】

## アラブ諸国における高等教育国際化

-UAE、カタール、エジプトを事例として-

Internationalization of Higher Education in the Arab States:  
Case Studies of United Arab Emirates, Qatar and Egypt

大阪大谷大学教育学部専任講師 中島 悠介

NAKAJIMA Yusuke

(Faculty of Education, Osaka Ohtani University)

キーワード：アラブ、高等教育、国際化

### はじめに

アラブ地域は一般的に、「アラビア語を話す人々がマジョリティを占める地域」とみなされ、東はアラビア半島諸国（UAE など）、西はチュニジア・モロッコなど北アフリカに至る地域を指し、その広大さゆえ、高等教育の国際化の状況もまた多様である。エジプトにおいて 975 年に建設されたアズハルモスクを起源とするアズハル大学は、今に至るまでイスラームの知の中心地であり続けており、多くのイスラーム圏からの留学生を引きつけている。その一方で、同じくエジプトのカイロ・アメリカン大学（1919 年～）やレバノンのベイルート・アメリカン大学（1866 年～）など、多くの欧米由来の大学もまた、伝統ある大学として存在感を放っている。そして 2000 年代以降、アラブ首長国連邦（UAE）やカタールといった湾岸諸国が欧米諸国の有名大学の海外分校を積極的に誘致しており、教育ハブとしての地位を確立するべく国家的な取り組みを推進している。本稿では、UAE、カタールそしてエジプトにおける高等教育機関や学生の国境を越える流動に関する動向を取りあげ、アラブ諸国における高等教育国際化の多様性の諸相を示す。

### 1. UAE における高等教育国際化—フリーゾーンを通じた外国高等教育機関の分校誘致

UAE は中東湾岸地域に位置する、7つの首長国から構成される連邦国家であり、一般的に産油国として知られているが、実際に石油資源が豊富なのは首都があるアブダビ首長国（アブダビ）のみであり、その他の首長国は産業の多角化により経済発展を進めている。特にドバイ首長国（ドバイ）につ

いては、ビジネスの規制を撤廃した経済特区（フリーゾーン）を整備し、積極的な外資機関の誘致によって経済開発を遂げてきた。教育部門のフリーゾーンとして、ドバイ・ナレッジ・パーク（DKP）やドバイ・インターナショナル・アカデミック・シティ（DIAC：図1）が整備されており、2013年時点で26の海外分校が設置されている。アブダビではドバイのようなフリーゾーンは整備されていないものの、5校の海外分校が設置されて



図1：DIACの建物（筆者撮影）。

いる。ドバイとアブダビの海外分校の誘致戦略の違いとして、ドバイが米国や英国などの欧米諸国からのみではなく、インドやパキスタン、イラン、レバノンなどの国々の高等教育機関の海外分校を受け入れていることに対し、アブダビはニューヨーク大学やパリ・ソルボンヌ大学といった欧米諸国の有名大学を積極的に誘致していることが挙げられる<sup>1</sup>。

図2は、ドバイにおける高等教育人口の変遷である。データが提示された2006年以降、2008年のリーマンショックやそれに付随する2009年のドバイショックの時期には学生数の増加に停滞が見られるものの、全体的に見ればある程度学生数が増加してきていることがわかる。学生の国籍については、フリーゾーン内の高等教育機関には海外分校以外の機関も含まれるものの、それでも外国人学生が多数を占めている状況が見て取れる。一方で、連邦立大学に関してはほとんどがUAE人学生で占められている。これは、UAE人学生は大学卒業後に主として公務員を志望する者が多く、そのためには公的部門に近い教育機関、つまり連邦立大学や各首長国が設置する公立大学へ進学することが近道であることが理由として挙げられる。フリーゾーン内の海外分校については、ほとんどは連邦政府の質保証機関である学術・適格認定委員会からの適格認定を受けていないため、これらの分校を卒業しても公務

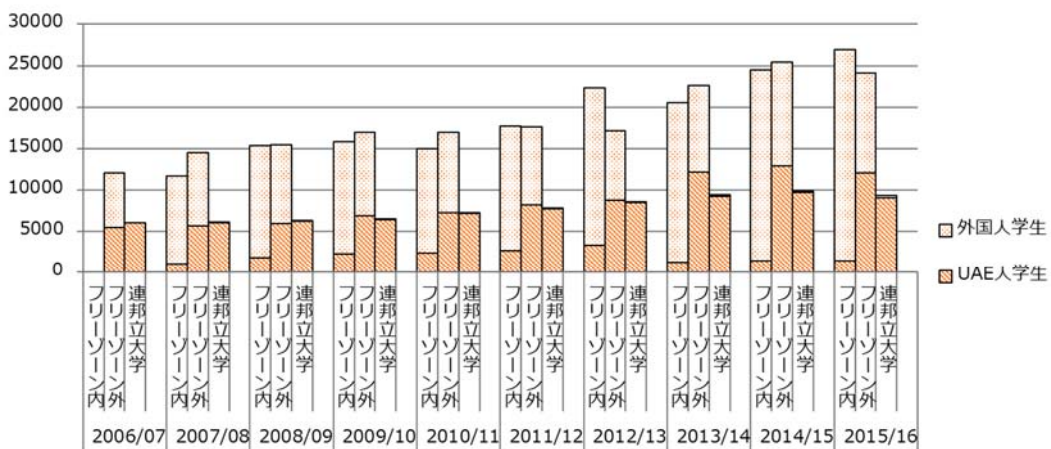


図2. ドバイにおける高等教育人口の変遷 (単位: 人)  
 出典: Dubai Statistics Center, *Number of Tertiary Students by Type of Institution, Nationality and Gender*, 2006, 2007, 2008, 2009, 2010, 2011, 2012, 2013, 2014, 2015より筆者作成。

1 中島悠介「アラブ首長国連邦における外国大学分校の比較考察—規制主体の多様化と分校の管理運営構造を中心に—」『京都大学大学院教育学研究科紀要』第62号、2016年、198頁。

員になるには制限があり、そのために UAE 人は海外分校への就学を敬遠する傾向がある<sup>2</sup>。これらの海外分校には、現地在住の外国人が主として就学しており、例えばフリーゾーン内の学生の国籍はインド人が約 35%、パキスタン人が約 9%、イラン人が約 7%を示している<sup>3</sup>。いずれにせよ、これらの海外分校は現地の UAE 人を主たる対象とするよりは、UAE 在住の外国人や留学生が就学するための国際的な教育ハブとして機能しているのである。

## 2. カタールにおける高等教育国際化—カタール大学の国際化戦略

カタールも UAE と同様、米国のジョージタウン大学やテキサス A&M 大学といった、有名大学の海外分校を誘致して高等教育の国際化を推進しているが、ここでは国立大学であるカタール大学（図 3）の国際化について取り上げたい。というのも、カタール大学は Times Higher Education (THE) World University Ranking の International Outlook において、2015、2016 年度と 2 年連続で 1 位を獲得したためである。THE のデータによれば、2016 年度の在籍学生数 11,844 人のうち、43%が留学生であることが示されている。それでは、なぜ突如としてカタール大学が International Outlook のランキングにおいてトップに躍り出ることになったのだろうか。

International Outlook は、主として「留学生の割合」「外国人教員の割合」「国際的なコラボレーション」の 3 つの項目のスコアにより決定される。UAE やカタールなどの湾岸諸国は、自国民が全人口の 1 割ほどであるため、THE の分析によれば、前者の 2 つにおいては比較的高いスコアが得やすいものの、カタール大学がトップになった最大の要因は、最後の「国際的なコラボレーション」における取り組みが評価されたからであるとしている。カタール政府は 2006 年に「カタール国家基金 (Qatar National Fund)」を設立し、集中的な資金の投下によって国際的な研究交流を積極的に進めてきた。その結果、過去 5 年で 319 の協力機関と 450 を超えるプロジェクトを実施し、1,093 の協力機関との



図 3：カタール大学全景（左） 図 4：カタール大学における日本イベント「Day in Nihon」の様子（右）  
（いずれも筆者撮影）。

2 中島悠介「ドバイのフリーゾーンにおける外国大学分校質保証の展開—二元的アプローチへの制度的変遷を中心に—」日本比較教育学会編『比較教育学研究』第 49 号、東信堂、2014、188 頁。

3 Tecom Investments. *Education Cluster Annual Review 2012*. 2013, p. 32.

3,200 を超える共著論文の刊行という結果に結実したとされる。2014年度までにTHEのランキングに現れてこなかった理由としては、カタール大学は1973年に設置された若い大学（young university）であるため、THEのランキングで評価される資格のための基準を満たすことができていなかったことが挙げられているが、今後どのような展開を示していくのか、注目すべきであろう<sup>4</sup>。

このように、カタール大学がTHEのランキングにおいて存在感を示してきているが、留学生を呼び込むために様々な取り組みを行っている。その1つに、カタール大学では1年間のアラビア語プログラム（Arabic for Non-Native Speakers: ANNS）が非アラビア語ネイティブを対象に提供されており、毎年約30名の留学生・カタール在住外国人が在籍している。学部や大学院に所属する外国人学生の多くがアラブ諸国からの学生で占められている一方で、ANNSの学生は東南アジアや南アジア、ヨーロッパ、南北アメリカなど、その国籍は多岐にわたるものであった。非アラビア語圏のムスリムがクルアーンを読むようになるためであったり、母国においてアラビア語教師や外交官を目指していたりなど、その目的はさまざまであったが、いずれも意識が高く、優秀な学生ばかりであった。また、日本との関係については、年に2回ほど、日本の伝統的な文化やサブカルチャーを紹介するイベントが全学規模で開催されている（図4）。これらのイベントの開催には、カタール大学の学生で構成される日本クラブとともに、在カタール日本大使館や日系企業、日本人留学生など多くの日本人が運営に協力しており、どのイベントも非常に盛況となっていることから、その関心の高さがうかがえよう。

### 3. エジプトにおける高等教育国際化—欧米諸国からの高等教育機関と留学生

エジプトでは1992年の「私立大学法」制定以来、外国資本の高等教育機関の設置も認められるようになり、2003年にカイロ・ドイツ大学（German University in Cairo: GUC）が、2005年にエジプト・英国大学（British University in Egypt: BUE）などが相次いで設置されている。これらの機関はあくまでエジプトの大学であり、欧米諸国の特定の大学の分校とはいえないものの、GUCはEUの単位互換システムであるECTS（European Credit Transfer System）を採用していたり、また、BUEは英国の質保証期間であるQAA（Quality Assurance Agency）からの質保証を受けていたりするなど、欧米諸国の高等教育制度と密接に結びつきながら展開しているため、エジプトにおいて人気を博している<sup>5</sup>。

また、高等教育部門におけるエジプトと日本の関係を見てみれば、やはりエジプト日本科学技術大学（Egypt-Japanese University for Science and Technology: E-JUST）が挙げられよう。E-JUSTは

4 Wazen, C. “How Qatar University Became the Most International Institution in the World.” Times Higher Education. <https://www.timeshighereducation.com/blog/how-qatar-university-became-most-international-institution-world>(2017年7月19日取得)。

5 中島悠介「日本が提供するトランスナショナル高等教育—エジプトにおけるE-JUSTプロジェクトを事例として—」『京都大学大学院教育学研究科 Exchanging Laboratory Program: 教育政策形成過程の動態的検証』文部科学省（2011年9月）報告資料。

2010年に開学し、産業発展が著しいアレキサンドリア郊外のニューボルグ・エル・アラブ市に位置している準公立の大学であり、JICAを中心に日本国内の12大学（早稲田大学、京都大学、九州大学など）がコンソーシアムを組んで協力関係を結んでいる。E-JUSTは「少人数、大学院課程、研究中心」を特徴に、主に工学関係の修士・博士課程として、電気通信工学、コンピュータ情報工学、メカトロニクス・ロボティクス工学、経営工学、材料工学、エネルギー資源工学、環境工学、石油化学工学の8専攻が設置されている<sup>6</sup>。また、2017年には学士課程が設置され、工学部と国際人文・ビジネス学部の2学部の学生募集が開始されており、2010年の開学以降、着実に拡大してきているといえる。

このように、エジプトの高等教育において欧米諸国や日本の高等教育機関と連携しながら国際化が進められている状況がある一方で、公立大学においても留学生の誘致が進められている。エジプトの公立大学における留学生数は47,000人であり、政変直前である2010年の2,000人以下という数字から急激な増加を示している。これらの多くは他のアラブ諸国からの留学生であり、シリアやイラクの情勢の変化によって現地で就学するのが困難な学生や、UAEやクウェイトといった湾岸諸国からの留学生が多い。留学生の授業料は年間5,000～9,000米ドルとされるが、政府は12,000米ドルまで上げることを予定しているという。ベンハ大学の学長であるEl-Sayed al-Qadiによれば、留学生から得られる収入は、10%は財務省に、10%は高等教育省に、25%は大学におけるインフラなどの教育サービスの質向上のために、45%は研究やプログラムの改善のために使用されるという<sup>7</sup>。このように、公立大学においても留学生から比較的高額な授業料を徴収することにより、大学の自立経営に活かそうとする意図が見て取れる。

以上の通り、エジプト全体としては高等教育の国際化が進められているものの、研究になると最近では気になる事件も起きている。The Guardian紙によれば、2016年1月、イタリア人の研究者がエジプトで殺害されるという事件が起きた。ローマにおける検死において、死亡する前に拷問を受けた形跡があり、肌が焼かれ、叩かれ、切断されていたということから「保安警察によるものではないか」ということが噂されている。被害者の研究テーマが「エジプトにおける労働組合」というデリケートな課題を扱い、実際にそれらの組合とコンタクトを取りながら、ペンネームを用いてジャーナリストとしても活動し、Il Manifesto紙においてエジプト政府を批判していたことが、そのように考える根拠として挙げられているが、真相は明らかになっておらず、研究者が事件に巻き込まれることが珍しいエジプトにおいて、「なぜ彼がターゲットとなったのか」という疑問を投げかけることとなった<sup>8</sup>。も

6 坂本和美「エジプト高等教育カントリーレポート」日本学術振興会、2015年、3-4頁。

7 El-Galil, T.A. “Egyptian Universities See Boom in Foreign Students.” Al-Fanar Media. <http://www.al-fanarmedia.org/2017/02/egyptian-universities-welcome-boom-foreign-student-numbers/> (2017年7月19日取得)。

8 Kirchgaessner, S. “Why was He Killed? Brutal Death of Italian Student in Egypt Confounds Experts.” The Guardian. <https://www.theguardian.com/world/2016/feb/24/why-was-he-killed-brutal-death-of-italian-student-in-egypt-confounds-experts> (2017年7月19日取得)。

ちろん確定していない情報であるため推測の域は出ないものの、エジプトのみならずアラブ諸国において研究活動を行うには、テーマを慎重に設定すべきであることは心にとめておいたほうがよいと思われる。

## おわりに

本稿では、UAE、カタールそしてエジプトの3つのアラブ諸国を取りあげ、高等教育の国際化の状況について、主に大学と学生の国境を越える移動の観点から紹介した。「アラブ」という地域で括られることが多いこれらの国ぐにであるが、高等教育の国際化の様相を見てみると、それは豊かな多様性を示していることがわかる。これらはイスラームという文化的な共通性があるものの、欧米諸国をはじめとした外国の高等教育機関も展開しており、国内の高等教育部門の発展に貢献している。また、カタール大学やE-JUSTの事例に見られるように、高等教育部門において日本と緊密な連携を構築しようとしている状況がある。これらのアラブの国ぐににおいて高等教育の国際化がどのように進展していくのか、今後も注目していきたい。

【海外留学レポート】

## 第2の母国オーストラリアと出会う

－アデレードでの高校・大学留学生活から－

Meeting My Second Home Australia:  
Study in High School and University in Adelaide

南オーストラリア大学 健康科学部（作業療法学科）卒 上 梓

KAMI Azusa

(Graduate, Bachelor of Health Science (Occupational Therapy),

University of South Australia)

キーワード：オーストラリア、海外留学、作業療法

### はじめに

留学当時（2005年）、南オーストラリア州の州都「アデレード（Adelaide）」を知っている日本人はまだまだ少なかった。しかし、2015年には、英雑誌エコノミストの実施する「世界で最も住みやすい都市ランキング」で、1位メルボルン（オーストラリア）や3位バンクーバー（カナダ）に次いで5位に入るほど、アデレードの魅力と人気が高まっている。生活費が安価で、治安が良く、他都市と比較して日本人が少ない、また国際的に評価の高い教育システムが完備されていることから、世界中から留学生が集まる都市へと変化している。そんな街アデレードに、私は16歳から23歳までの7年間、留学することとなった。アデレードで高校と大学を過ごしたことは、かけがえのない貴重な経験であり、一生忘れることのない思い出がたくさんできた。帰国して5年経過した今、心底思う。本稿では、私が留学に至った経緯と7年間の現地での生活について、お話ししたいと思う。

### 留学を決意

留学の意思を固めた出来事が、2つあった。1つ目は、小学校5年生にさかのぼるが、父親の仕事の関係でアメリカ・ニューヨーク州に住んでいた。9か月間という短期間で、また日本人学校に通っていたこともあり、英語が流暢に話せるまでにはいかなかった。しかし、その9か月間がその後の私の英語に対する考え方に大きな影響を与えたのは確かで、中学校進学後、多くの同級生が苦手意識を持つ英語学習に対して、私は抵抗が全くなかった。また、9か月間の日本人学校での生活でできた友達と、

帰国後も1年に1回程度の頻度で再会していたことが大きい。もう1つの出来事は、中学3年生の時、学校で「卒業生の職業紹介」という総合授業が行われ、短期間でも留学を経験することが自分の将来のキャリアに良い影響を与えるという話を聞いた。将来は医療福祉系の仕事に就きたいと当時から考えており、日常的にあまり使わないにしろ、福祉分野においても英語は必ず必要になると考えた。また、自分の中でなにか1つでも得意なこと、自慢できる経験がほしかった。両親と担任教諭と相談を重ねた結果、高校1年生を準備年として、高校2年生の1年間、留学することを決意した。大学受験を控えた高校2年生で留学すること、さらに中学1年生から一緒に過ごしてきた友人達と離れることについては、最後の最後まで悩んでいた。両親と担任はもちろんのこと、前述の卒業生や留学経験者に話を聞き、留学することのメリット・デメリットを検討したうえで、短い期間でも留学を通して自分自身に挑戦することに意義があると感じ、留学を決意した。

留学支援会社に登録したことで、出発までの様々な手続きをサポートしてもらえ、その1つに留学先での学校の選定があった。世界でテロや感染症が相次いだこともあり、治安を考慮したうえで複数の都市が候補としてあがり、その中の1つにアデレードがあった。アデレード市内においても留学生を受け入れる州立・私立高校がたくさんある中で、私は留学生に対する支援、運動・部活動に積極的に取り組むアデレード高校を希望した。準備年（高校1年生）はあっという間に過ぎ、2005年5月、アデレードへ出発した。

### 留学生のための英語クラス

私が通学していたアデレード高校の「アイセック（Intensive Secondary English Class : ISEC）」は、留学生だけで英語で学ぶクラスであり、算数（数学）、英語、理科、社会（歴史）、総合などの科目について、1日6時間授業が行われた。小学校で習うような簡単なことでも、英語で伝えようとすると困ってしまうことが多々あり、毎日が学びであった。例えば、算数の「足し算」「引き算」「掛け算」「割り算」を英語で何と言うのか、知っているようで知らないことばかりで、留学1週間で、自分の英語力の無さに愕然としたことを覚えている。当時、私が在籍したアイセックには合計15人ほどの留学生がおり、日本人は私を含めて2人、ベトナム人2人、その他は中国人だった。多くの留学生がアイセックから学校生活をスタートし、その後、メインストリーム（mainstream）と呼ばれる通常学級で、現地の学生やアイセックを卒業した留学生と共に、数学、生物、化学、体育などの通常の授業を受ける。1年を通して留学生がアイセックに入学してくるため、毎月新しい留学生が入ったり、卒業してメインストリームへ進んだり、生徒の入れ替わりはとても頻繁にあったため、様々な国籍の留学生と出会うことができた。当初、留学期間は1年間の予定だったが、前述の通り、自分の英語力の無さに愕然したこともあり、もっと英語を学んでから帰国したいと考えるようになった。悩んだ結果、高校卒業まで留学期間を延長することにした（後に、大学卒業まで延長することになる）。





アデレードの観光地 セントピーターズ大聖堂



アデレード高校の日本語クラス

### 日本の大学受験との違いとは

オーストラリアの大学入試制度は、日本の入試制度と大きく異なり、「大学受験」という考え方はない。基本的に、Year12（高校3年生）の1年間の成績によって、入学できる大学が決まる。オーストラリアは、広大な国土や文化の多様性などに配慮する形で連邦制を採用していることから、連邦政府には、日本の文部科学省に該当するような官庁は設置されておらず、教育は各州・テリトリーに設置された教育省に委ねられている。そのため、大学入試制度も各州によって異なり、私がいた南オーストラリア州をはじめ、多くの州では、高校3年生の最終学期（11月）に、各科目の州統一最終試験がある。試験は、南オーストラリア州の学校に在籍しその科目を選択した生徒全員が同日に受ける仕組みになっている。日本の高校からオーストラリアに留学して一番驚いたことは、授業科目が全て選択式だったことである。オーストラリアでは、Year11（高校2年生）とYear12（高校3年生）は、全ての科目が選択式になり、科目はYear10（高校1年生）の時に、学校のカウンセラー、担任教諭、科目別教諭と相談しながら、自身の得意科目や将来の方向性に合わせて選択する。Year10の時に選択した科目が、前述した高校3年生の最終試験の科目に繋がるため、科目の難易度や進学したい学部のレベルとのバランスがとても重要である。オーストラリアのように、科目が全て選択式の場合、得意な分野で自分の知識・能力を伸ばすことができるため、学年もしくは科目ごとに飛び級をする生徒が多い。最後に、選択したyear 12の科目の最終試験での成績、学業成績（テスト・課題、授業態度）、学校の学業レベルを総合的に評価し、Tertiary Entrance Rank（TER）という得点が算出され、最終試験後の12月に発表される。TERは日本の偏差値と類似している。最高は99.9%で、自身のTERが志望する大学の学部が提示する入学基準（ボーダーライン）を上回れば、入学が可能である。私が志望した「南オーストラリア大学 健康科学部 作業療法学科」のボーダーラインは85.0%（留学生枠）だった。私は第2言語として日本語を選択して満点を獲得できたこと、そして数学を飛び級できたことが奏功し、無事にTER96.2%を取得することができ、入学が叶った。日本の大学受験も大変だと思うが、

オーストラリアでの大学進学も非常に複雑で大変なプロセスで、入学できたときにはとても安心した。もちろん、各大学は「現地生徒枠」と「留学生枠」に異なるボーダーライン（TER）を定めており、「作業療法学科」の現地生徒枠は92.0%で、留学生枠は7.0%低い85.0%だった。英語のハンデを考慮して、留学生もきちんと進学できる仕組みになっている。

アデレードにはアデレード大学、南オーストラリア大学、フリンダース大学と、主に3つの大学があり、各大学に特徴と強みがある。私が進学した南オーストラリア大学は1991年設立の比較的新しい大学で、大きく分けてキャンパスを市内に2つ（文科系キャンパス、医療福祉系キャンパス）、市街に3つ（看護系、IT系、教育系）構えている。現在は3万人以上の学生が在籍しており、多岐にわたる専門学科を提供している。私の学んだ作業療法学科は、南オーストラリア大学のみを設置されており、物価の安さや治安の良さもあり、作業療法士への夢を叶えるため全国から学生が集まる。

### 作業療法学科と大学生生活

作業療法士（Occupational Therapist）は、何らかの病気や障害で食べる、歩く、シャワーを浴びるなどの日常生活に必要な基本的な動作（作業）が難しい人々のために寄り添い、リハビリテーションやカウンセリング療法を行う専門家である。作業療法学科には、入学時は約70名の学生がおり、年齢も18歳から50歳まで多様だった。アジア人、そして留学生は私ひとりだったため、「学科の選択を間違えてしまったかも」と感じるほど、とても心細かったのを覚えている。作業療法学科での授業は、日本人としては驚くぐらい授業数が少なく、1学期に4~5教科ほど、年間多くて10科目であった。授業で出欠を取ることはなく、毎授業で課される課題（アサイメント）と最終試験の結果でその教科の成績が決まる。リハビリテーションの専門家ということもあり、グループワークで取り組む課題が多く、課題を行うためには予習・復習を含めた自主勉強をきちんと行わなくては単位の取得が難しい。基本、課題提出の遅れや単位を落とした場合の救済措置はなく、作業療法学科は1年に1学期しか開講しない専門科目がほとんどであることから、その科目を落とせば1年後まで待たなくてはいけない。オーストラリアの大学への入学は簡単だが、卒業が難しいと言われる所以はそこにあると感じる。もちろん、授業の他に現場実習もあり、4年間の在学中、老人ホーム、幼稚園、精神クリニック、補助具・補装具センターなどで、1週間から6か月程の実習を行った。

私は英語のハンデがあったことから、生理学、心理学、解剖学、研究法など一般基礎科目だが英語の専門性の高い授業については、授業後や休日でも自習時間に時間を費やして勉強していた。単位を落としそうになった時、勉強をしても成績が上がらなかった時、実習先の患者さんに英語のミスを指摘された時、正直なところ何度も諦めようと思った。それでも、グループワークやレポート提出時には、留学生や第2言語を学ぶことに対して理解の深い友達に、英文をチェックしてもらうなど助けもらったことで、4年間の大学生生活を乗り越えることができた。英語力を補うために、授業の合間に

障害者や高齢者の自宅訪問介護のアルバイトをしたことも、自信をつけることに繋がった。4年間の大学生活があったからこそ、様々なことにチャレンジしたいと思える今の自分があると思うと、とても貴重な経験だったと感じる。



大学4年作業療法実習先にて



Mt Lofty でハイキング中にカンガルーに会う

### 大学からのサポートと大学への貢献

大学4年次が始まったばかりの2011年3月、東日本大震災が発生した。私は実習先からの帰りの車の中で、友人からのメッセージで地震が発生したことを知った。頻りに地震が発生するため、メッセージが来た時もあまり深く考えていなかったが、家に着きテレビを付けると、とても胸が苦しくなる映像が流れていて絶句した。東北地方に親族は住んでいなかったものの、オーストラリアにいて何もできないもどかしさで心苦しくなっていた。大学は、自国が震災やテロなどの影響を受けた学生に対して、心理面でとても手厚いサポートをしてくれる。私も東日本大震災時に学生支援センターでカウンセリングを受けたことで、悲しみ・もどかしさを感じながらも授業・実習を乗り越え、その夏には福島でボランティア活動をするための一時帰国を決意することができた。

南オーストラリア大学には、在学生による大学貢献活動として、「Student Ambassador Program」があり、学生が大学を代表する学生大使として、オープンキャンパスでの広報活動、高校生と保護者向けの相談会などで活動するボランティアプログラムである。応募したところ見事大使に採用され、大学4年次の1年間、留学生代表の学生大使として活動することとなった。普段意識することのない各学部・学科の内容や、入学手続きを英語で説明することはとても苦労した覚えがある。しかし、オープンキャンパスでの受付や留学生に対する情報提供を経験したことで、英語にまだまだ不安を覚えていた自分に自信がつき、さらには作業療法学科の同級生以外の友人を作ることができた。完璧な英語ではないにしろ、失敗や恥をかくことを恐れず、様々な形で留学先の街・大学に貢献することが成長するために1つ重要なきっかけだと感じるプログラムであった。

上記の活動や7年間の高校と大学での成績を評価され、大学4年次に「South Australia: Governor's

international students awards - academic excellence (南オーストラリア州知事留学生賞 - 学問学術の部)」を受賞することができた。この賞は南オーストラリア州内の留学生が対象となり、申請書、推薦状、業績一覧で総合評価し、4つの部門(①Academic Excellence〈学問学術〉、②Sporting Achievement〈スポーツ〉、③Community Engagement〈地域貢献〉、④The Arts〈芸術〉(2011年当時)で1名ずつ選出される。7年間の留学を終える私にとって、大学最終年に当該賞を受賞できたことはとても感慨深いものだった。

## 7年間の留学を終えて今

アデレードで過ごした7年間は、非常に濃密なものだった。大学を卒業し、2012年1月に日本に帰国を決めた理由には、大学院への進学がある。留学初期に、英語が話せなくても部活やスポーツ活動を通じて友達が作れ、学校生活を楽しめた経験があったため、大学在籍中に障害がある方と触れ合ううちに、「障害者は運動・スポーツする機会があるのか」「運動はできないと思っている人が多いかもしれない」と疑問に思うようになったからである。帰国し大学院に在籍した2年間(2012~2013年)、作業療法学科で得た障害者福祉とリハビリテーションに関する知識をいかし、障害者スポーツとパラリンピックを専門に研究を行った。国内はもちろん、海外の学識者やスポーツ関係者に対してインタビュー調査を実施し、2013年にはベルギーで開催された学会で研究成果を発表することもできた。多くの学生・院生が英語での読み書き、発表に抵抗を感じていた中、海外の学会で発表する英語力・行動力を身に付けることができたのは、留学を経験したからだと感じている。そして大学院修了後、スポーツ団体に就職し国内・外の障害者の運動・スポーツに関する社会調査を行うまでに成長した。福祉やスポーツの分野で英語を使いこなせる人はまだまだ日本には少なく、海外留学の経験が自分のキャリアの選択肢を広げていることを改めて実感している。今後は、英語に苦手意識を感じる人々にも、留学は英語力だけではなく、自己・他者理解、向上心、行動力、広い視野を身に付けることができることを伝えていきたい。

最後に、今、私には「障害がある子もない子も共に英語・運動を学べる学習教室の開設」という夢がある。これまでの経験を集大成し、さらに自分に不足している知識(英語の教授法、英語教材の製作など)を身に付けたいと思う。この夢を見つけることができたのは、7年間の留学で得た成果の1つである。



# 海外の大学院で学位取得を目指す方へ！ 海外留学支援制度（大学院学位取得型）

独立行政法人 日本学生支援機構が**給付型奨学金**でサポートします！

※平成26年度まで「海外留学支援制度（長期派遣）」として実施していた奨学金制度を、平成27年度募集から「海外留学支援制度（大学院学位取得型）」に名称変更しました。

支援内容

**奨学金及び授業料の支給**

①奨学金：月額8万9,000円～14万8,000円  
(留学先国・地域により異なります。)

②授業料：年間250万円を上限とする実費額

※これらの支給額については、政府予算の状況により変更する場合があります。

採用人数

100名 (平成29年度実績)

対象者

■**修士又は博士の学位取得**を目的として海外の大学院へ留学する方

■**学士の学位**を取得した又は取得見込みの方

※その他、学業成績要件、語学要件、年齢制限等があります。

支援期間

■「修士」の学位取得コース：**2年**

■「博士」の学位取得コース：**原則3年**

留学先  
対象国  
・地域

学位取得可能な大学院がある  
諸外国・地域

募集時期  
応募方法

募集時期や応募方法は、(独)日本学生支援機構のウェブサイトにご公表する募集要項等によりご確認ください。

※国内の在籍又は卒業大学を通して応募していただけます。なお、募集要項で定める条件に該当する場合は個人での直接応募が可能です。

本制度に関する詳細な情報は、(独)日本学生支援機構のウェブサイトをご覧ください

[http://www.jasso.go.jp/scholarship/long\\_term\\_h.html](http://www.jasso.go.jp/scholarship/long_term_h.html) QRコードからアクセス▶



JASSO

独立行政法人  
**日本学生支援機構**

Japan Student Services Organization

海外留学支援制度受付センター  
(受託者) レジェンダ・コーポレーション株式会社  
TEL: 03-6863-5558 (営業時間: 平日9時～18時)

次号予告  
ウェブマガジン『留学交流』10月号  
特集「海外の大学との交流」

協定校との交流・留学プログラム、非漢字圏・漢字圏との交流（予定）

---

ウェブマガジン『留学交流』 9月号

---

Vol. 78

---

平成29年9月11日発行

---

編集 独立行政法人日本学生支援機構

---

（編集部）留学情報課

---

東京都江東区青海 2-2-1（〒135-8630）

---

電話 (03) 5520-6111

---

FAX (03) 5520-6121

---

Eメールアドレス [ij@jasso.go.jp](mailto:ij@jasso.go.jp)

---

## 編集後記

本号では、「外国人留学生の宿舎支援と活用」と題し、中国語圏のレジデンシャルカレッジ、現代のホームステイのあり方について考察し、シェアハウス型混住宿舎、留学生の住まいに関する提携の事例を取り上げております。

また、海外の教育事情はアラブ諸国における高等教育の国際化を、海外留学レポートでは、豪州での高校・大学留学経験をご紹介します。

本号が、外国人留学生の宿舎支援に携わるみなさまの参考となることを願っています。

本誌へのご意見、ご感想は、上記Eメールアドレスまでお願いいたします。 （編集部）

## Web Magazine “Ryugakukoryu”(Student Exchanges)

“Ryugakukoryu” delivers a variety of necessary information and materials to faculty and staff engaged in acceptance and dispatch of international students, and educational guidance.

The magazine has been made public online without charge since April 2011.  
(Issue date: 10th of each month)